

---

# 真・恋姫†無双～龍を従える剣士～

冥志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真・恋姫†無双〜龍を従える剣士〜

### 【Nコード】

N35450

### 【作者名】

冥志

### 【あらすじ】

現世にて事故って死んだはずなのに、気が付いたら上下左右真っ白な所に…

この小説は、オリ主です。

そして処女作です。

故に原作崩壊、及びキャラ崩壊等があると思います。

それでも大丈夫だと言う方は、駄文ですが、閲覧して行ってください。

## 0 話

突然ですが、死にました。

ええ、それはあっさりと。

道路に飛び出した子どもを、突き飛ばして自分は引かれるという、なんともよくある転生系な感じで死にました。

因みに、自分『金城龍介』といいます。

気が付いたら、四方八方、真っ白な所にいました。

「ここは…天国…ですかね？」

こんな所で疑問を声にしても返事が返って――

？「違います、まだ天国じゃないです。」

――きてしまった。…まあいい、返事がくるなら質問しよう。

「二つ質問があります。まず一つ、あなたは誰ですか？もう一つ、ここは何処ですか？」

？「一つ目の質問の答えは、私は神様です。二つ目は、天国の一手手前です。」

「あともう一つ、僕は死んだはず。何故ここにいるんですか？」

神「貴方は、私のミスで死んでしまったので、ここに魂を呼び止めたんです。」

神様でもミスするんだ。と思った。

神「このまま死んで貰うと、少々困るので、別の世界に行つて欲しいんですね。まあ私のミスなんで、一つ願い事を叶えてあげます。何がいいですか？」

「因みに、僕の行く所は何処ですか？」

神「ええつと、、『真・恋姫†無双』ですね。」

「本当ですか!？」

神「はい。本当です。」

「それでは…氣を使えるようにしてください。」

神「それで本当にいいですね？」

「はい。」

神「それでは、、『真・恋姫†無双』の世界へ、行ってらっしゃい。」

少しずつ意識を手放していく。

その途中、

神「あつ！因みに、剣に氣を纏わせると、龍の形になります。」  
と言っていた。

## 1話

）　　？　　？　　？　　side　　（

ボクは今中庭の木陰で、霞と休憩している。

因みにボクの名前は、賈馱、字は文和っていうの。

霞は、張遼、字を文遠よ。

『霞』っていうのは真名だから気をつけてね。

…誰に言ってるのやら…。

霞「なあ、賈馱っち。最近、巷で噂の『天の御使い』ってしつとる？」

「知ってるわよ。あのエセ占い師の戯れ事でしょ。確か、『天より来たりし二人の御使い、流星ともに現れん。その二人が乱世を静めるだろう。』でしょ。」

霞「やっぱり、知ったんやね。どや？この噂信じる？信じたひん？」

「信じないに決まってるでしょ！」

霞「やっぱりな。ウチは信じても……………ちょ！賈馱っち！あれ何や！？」

「え？あれって？」

空には二筋の流星があった。

「流星？……何かこつちきてるし！」

霞「あかん！逃げ！」

その流星は中庭に落ちた。

「ケホ…ケホ…。霞？大丈夫？」

霞「ゴホ…ゴホ…。ああ、何とかな。……あれだれや？」

霞が中庭を見て言う。

その方向を見ると…。

さっきまでいなかった男が倒れていた。

「嘘でしょ！あの占いが本当だっていうの！？」

霞「そうみたいやね…。…おい、大丈夫か！？」

「ちょ！霞！妖の類かもしれないのよ！？」

霞「えゝだって気になるやん。賈馱っちもそうやろ？」

「確かに気になるけど…。」

霞「じゃあ起こしますか。」

そう言って、倒れている男に近づく。

） 賈馱 side out ）

〕 龍介 side 〕

?1「おい、生きとるか？」

誰かの声がする。

「う…ん…、……………ここは？」

?1「おっ！気が付いたか。」

目を開けるとそこには、さらしを巻いた女性と眼鏡をかけた女性がいた。

「えっと…貴女がたは…？」

（ 龍介には原作の知識が一応あります ）

?2「人に名前聞くときは、自分から名乗ったら？」

「そうですね。失礼しました。僕は金城龍介といいます。」

?1「姓が金で、名が城、字が龍介か？」

「えっと、姓が金城で、名が龍介です。字はありません。」

?1「そっか、龍介か。よろしゅうな。ウチは、姓を張、名を遼、字は文遠ってゆーねん。ほら、賈馱っちも。」

？2「わかってるわよ！ボクは姓を賈、名を駟、字は文和よ。…と  
ころであんたが天の御使いなの？」

「僕のいた所が天というのなら、そうだと思います。」

賈「少し質問してもいい？」

「はい。どうぞ。」

（小一時間後）

賈「つまり、あんたは1800年後の世界の人。そういうことではないのね？」

「はい。そんな感じですかね。」

一応、賈駟殿は僕の話を理解してくれたようだ。

賈「一応質問。今私達が、何処に仕えているか、わかるわよね？」

「恐らく、董卓殿の所、でしょうか？」

賈「正解よ。あんた何処に行く宛てってあるの？」

「何処もありませんが…?」

賈「じゃあ、ボク達ときて。月に合わせあげる。何か特技とかある?」

「武術は、一応剣と弓ができます。」

張「そうなん!ウチと手合わせしようや!」

「はい。是非。」

張「それじゃあ、徴錬場いこ!」

張遼殿は僕の手を引いていく。  
引かれながら問う。

「僕の武器は?」

張「剣ならあるんやけど、剣でええ?」

「はい。大丈夫です。得意なのは剣ですから。」

張「そか。そらよかった。そや!賈駆つち、みんなを呼んできてや!」

賈「そうね、龍介の実力も測れるし、顔合わせにもなるし。それじゃ呼んで来るわね。」

少し時がたち…

僕は張遼殿と向かい合っている。

賈「審判はボクがやるわ。…それじゃ、準備はいい？」

「「応！！」」

賈「始め！」

張「はああああ！」

開始と同時に張遼殿が突っ込んできた。

「（速い！…けど、あの速さならいける！）」

張「でやあ！！」

張遼殿が飛龍偃月刀を振り下ろす。

大きな音とともに砂埃が宙を舞う。

周囲は張遼の勝ちを確信した。

砂埃が収まると、周囲はその光景に、目を丸くした。

張「まいった。」

龍介の剣が張遼の首に当てられていた。

賈「それまで。…勝者、龍介！」

張「何や、強いやん。さっきの、どうやったん？」

「えっと、張遼殿の攻撃を剣で逸らして、そのまま、首に持ってた。それだけです。僕はあまり攻撃が得意ではないので、攻撃の合間の一瞬の隙を衝く攻撃の仕方をするんです。…まあ、周りには邪道だ。と言われますがね。」

張「ははん。なるほどな。でもそれが龍ちゃんの戦い方何やる？」

「はい。誰に何と言われようと、これだけは譲れません。これをやらないと、師匠は愚か、兄弟子にも勝てなくなりますからね。」

張「そつか。……………せや！ウチの真名受け取ってや。」

「真名？」

張「おりよ？真名を知らんの？」

「はい。お恥ずかしながら…。」

（　　嘘です。知ってます）

張「真名ちゅーのはな、その人に付けられた神聖な名前や。たとえ知つつても、声にしたらあかん。その人の許可無しに呼んだら、首を切られても文句はいえん。」

「そんな神聖なものを受け取ってもいいのですか？」

張「別にええよ。ウチに勝ったんやし。という訳で、ウチの真名は

霞「ってゆーねん。よろしくな。」

「えっと、僕には真名が無いので。恐らく龍介の部分が真名に近いと思うので。龍介と呼んでください。」

霞「初対面の人に真名教えたんか？」

「真名に近いと言っただけです。」

霞「そつか。じゃよろしくな龍介！」

「こちらこそよろしくお願いします。霞さん。」

霞「できれば敬語やめて貰えへん？あと、さん付けも。呼び捨てでお願いするわ。」

「敬語は癖になってしまっているのだからわかりませんが、努力します。それじゃ、よろしく！霞！」

霞「応。よろしゅうな。」

こんな話をしていると

賈「へえーすごいじゃない。霞を負かすなんて。」

?1「すごいですね。」

?2「…………恋と同じくらい強い。」

?3「れっ、恋殿！？こんなのが本当に強いのですか!？」

？4「私とも勝負しろ！」

賈馱殿と、あとから来た四人が話しかけて来た。

「えつと…貴女がたは？」

？1「あつ！自己紹介がまだでしたね。私は姓を董、名を卓、字を仲衛、真名を月といいます。」

「真名まで。いいのですか。」

賈「ちよつ！月！何真名まで教えてるの！？」

月「だって、霞さんに勝っちゃいましたし。…何よりかつこいいから（ボソツ）。」

賈「ちよつ！月！何言ってるの！」

「？」

？2「……………恋は呂布、字は奉先、真名は恋。」

？3「恋殿！？何故真名まで教えとるのですか！」

恋「……………龍介、強い。だから、教えた。……………ねねも教える。」

？3「ううゝ。仕方ないのです。ねねは姓は陳、名は宮、字は公台、真名は音々音、言いにくかったら、ねねでいいです！恋殿に言われたから教えるのです！勘違いするななのです！」

？4「私は華雄だ。さあ！早く勝負しろ！」

「はあ…。わかりました。それじゃ賣k…「詠よ」え？いいのですか？」

詠「何！みんなのは受け取って、私のは受け取らないっていうの！」

「いえ！そういうことじゃないです。それでは、詠さん、もう一度、審判をお願いします。」

詠「いいわよ。…それじゃ二人とも、準備はいい？」

「「応！！」」

詠「それじゃ…始め！」

華「はああああ！」

華雄さんは、霞と同じように、突っ込んで来た。

「（…華雄さんは、見るからにパワータイプか…。ならこれか。）はっ！」

華雄さんの斧を弾く。

「（さすがに重いな…。よし。決定。）…はっ！」

突っ込んで剣をふる。

華「ぐっ！…はあ！」

案の定、華雄さんは僕の剣を弾く。次の瞬間。

「これで…終わりです。」

華雄さんの首に剣を当てていた。

華「……………まいった。」

詠「それまで！勝者、龍介！」

「ふう…。終わった。」

霞「ほんま強いな。なあ賈馱っち、龍ちゃん、ウチらの軍に入れへん？」

詠「元からそのつもりよ。月、どうする？」

月「もちろんいいですよ。あれだけ強ければ、拒む理由がありませんから。」

「それじゃ、よろしくお願いします。……………そうだ！皆様をお願いします。」

詠「何？」

「僕に名前をつけて貰えませんか？」

詠「なんで？そのままでいいんじゃない？」

「向こうの世界との決別のため……………ですかね。」

詠「そう。なら……………姓は鐘、名は金、字は城淵、真名は龍介。  
…これでどう?」

「ありがとうございます。……………僕は姓を鐘、名を金、字を城淵、  
真名を龍介といいます。皆様に真名を預けます。これからよろしく  
お願いします!」

こうして龍介は乱世の中に入っていった。

## 2話（前書き）

今回は短めです。

## 2話

僕が董卓殿の配下になった次の日。  
今日は、恋さんと向き合っている。

「（今日は恋さんが相手か…、氣、使ってみようかな。…そうだ！  
『あれ』試してみよう！）…はっ！」

剣に氣を纏わせる。…すると、  
纏わせた氣が龍の形になった。

「おお。本当だったんだ。」

恋「…何、それ？」

少し身構えて聞いてくる恋さん。

「氣を纏わせてみただけですよ。今日は恋さんが相手だし…。本気で  
行かないと…」

？「は～ん、ウチらには手え抜いとったんか？」

「え？あつ霞さん。いえ、手を抜いていた訳ではなく、自分が氣を  
使えると、わかったのが昨日の夜だったので。」

霞「そか。じゃあしゃーないな。…せや！二人とも本気でやるんや  
ろ？」

「はい。そのつもりですが…。」

霞「そんなら、ちと待ってな。みんなを呼んでくるわ!」

そう言つと霞さんは駆け出して行つた。

しばらくすると霞さんがみんなを連れて来た。

詠「ちよつ!あれなに!」

龍を見た詠さんが、声を上げる。

霞「落ち着き。あれが龍ちゃんの、本当の力や。」

「気付いたのは昨日の夜なんですけどね。」

詠「ふん。ところで、本気で恋と手合わせするの?」

「はい。そのつもりです。」

恋「…早く、やろ。」

「よし。じゃ、やりますか。誰か審判、お願いします。」

霞「ウチが審判するわ!二人とも、準備はええか?」

「応!」

恋「(…コクッ)」

霞「よっしゃ!………始め!」

恋「…いく！」

恋さんが方天画戟を振ってくる。

「はっ！」

僕はそれを弾いて、自分の剣を振る

恋「…甘い。」

恋さんはそれを涼しい顔でかわし、戟を振ってくる。

「まだまだ！」

自分は氣で作った龍を動かし、戟を止める。

「流石は、飛將軍、呂布ですね。…一筋縄では無理ですかね。」

恋「…そんなことない。…龍介も強い。」

詠「あの龍、動くのね。」

霞「そうみたいやね。」

「（一対一だと、龍は使いづらいな…。それなら…。）」

軀中に氣を巡らす。

「さて…。逝く。」

） 龍介 side out ）

） 霞 side ）

龍「さて…逝く！」

龍ちゃんの剣から龍が消え、龍ちゃんの目つきが変わった。

それから、龍ちゃんと恋はすごい武を見せてくれた。

その二人の『武』は『舞』へと昇華する。

攻撃に勝るは呂布。

それに対して、

防御に勝るは鐘金。

この二人の武は、猛々しく、かつ、優雅なものだった…。

） 霞 side out ）

） 龍介 side ）

恋さんとの手合わせを始めてから約30分。

「はあ…はあ…。…もー無理！降参！…流石に恋さんは強いな…。」

僕は氣を使い果たし、仰向けになり空を見上げていた。

恋「…そんなことない。…龍介、強かった。」

「はは、…ありがと。」

音「恋殿に褒められているのですぞ。もっと喜ぶのです!」

詠「すごいわね二人とも…。あれはもう手合わせの域越えてたわよ。」

月「すごい綺麗でした。」

霞「いや、あれだけのもん見てまうとな。あつさり負けたのも領けるわ。」

華「龍介!もう一度勝負しろ!」

「すいません、華雄さん…。もう無理です。」

霞「華雄。見て分らんか?多分もう無理やろ。」

「多分じゃなくて、絶対無理です。」

華「そこは気合いで何とかなるだろ。」

「なりません!絶対に!」

こうして恋さんとの手合わせが終わった。

次の日にはひどい筋肉痛に襲われた。すごい痛かったです。

## 2 話（後書き）

誤字等ありましたら報告お願いします。

感想等もお待ちしております。

### 3話

恋さんとの手合わせから数日後、詠さんから緊急招集された。

理由は城付近の町に賊が攻めて来たからである。

まあ、こちらには天下に名高い飛將軍・呂布を筆頭に、神速の張遼、猛將・華雄の三人がいる。賊ごときに、負けることはないだろう。

今は、賊と当たるにあたつての策を話し合っている。

詠「という訳で、龍介は霞の所に入ってもらつて、中央に華雄、右翼に恋、左翼に霞で、お願いね。…多分勝てるでしょう。」

華「多分じゃなくて、絶対勝てるだろう。」

「華雄さん、戦に絶対なんて言葉を使うのはどうかと。僕が知ってる限りでも、たった八百の兵で策を駆使して、数万もの軍を撃破している人物もいます。」

霞「その通りやで、絶対勝てるって慢心している奴から死んでいくねんで。」

華「うつ…。」

詠「雑談はそこまでにして、全員準備しなさい。」

全員「了解!!」

僕は霞さんの後を追って会議室を後にする。

自分の準備が終わり、霞さんとのへと向かう。

「霞さん。何か手伝うことがあります？」

霞「もうないで。…それよかさん付けと敬語止めてな。」

「あつ！ゴメン！つい…。」

霞「はよ直してな。…龍ちゃんなんか不安そうやな。」

「いえ…、大丈夫です…。」

霞「ウチの目はごまかされへんで。…龍ちゃん人切ったことないんやろ。」

「っ！」

霞「凶星か。」

「…やっぱりわかります？」

霞「そんな顔しとつたら嫌でもわかるわ。」

「そんな顔してたかなあ。」

霞「しとつたで。何か思い詰めるような感じやった。」

「そうですか…。まあ確かに人を切ったことはないですけど、斬死体は一度だけ見たことがあります。」

霞「その一度つて？」

「その話し聞きたいですか？」

霞「ああ、聞きたい。」

「わかりました。話します。」

|

|

|

|

ある日、僕は普通に友人と話しながら家に帰っていた。  
友人と別れ、いつもの道を、いつも通りに帰って行った。

家に着いて

「ただいま。」

と声をかけたが、返事は無かった。

「珍しい、誰も居ないのか。」

と呟いて部屋の明かりを付けた。

そして、目に飛び込んできた光景に愕然とした。

そこには、包丁のようなもので切り付けられたり、刺されたりした、父と母『だった』ものがあつた。

「父さん…？母さん…？」

声をかけてみるが、もう命の糸は切れていた。

「うわああああ……！！」

僕はその場に泣き崩れた。

「うつ…、ここは…？」

気が付いたら知らない天井だった。

話を聞いたら近くの家の人が、通報してくれたらしい。

警察が来た時に、僕は憔悴仕切っていたらしく、そのまま病院に運び込まれたらしい。

その事件の後、僕は親戚を盥回しにされた。

必然的に僕は敬語でしか話さなくなり、昔の友人からは「変わった」と言われ、徐々に仲間外れにされて行った。

――

――

――

――

「…と言うのが、僕が一度だけ斬死体を見た全貌です。」

すると、霞が突然抱き着いて来た。

少し泣いているようだった。

霞「ゴメンな。迂闊に聞いたらあかん話を…。」

「いいんです。多分、僕はこの話を、誰かに、…いや、信頼できる人に聞いて欲しかったんだと思います。」

霞「なんでや？」

「何故かはわからないけど、ずっと心の中に閉じ込めておくより、信頼できる人に聞いてもらった方が、少しは楽になるかなと思ったんです。」

霞「それが、ウチでよかったんか。」

「はい。霞さんだから、話せたんだと思います。この世界にきてから、僕の言う世迷い事のようなことを、最初に信じてくれたんですから。」

霞「そんな言い方なら、敬語とか、さん付けやめてや。」

「…そうだね。じゃあ、よろしく。霞。」

そんな話をしていたら出撃の時間になった。

詠「…みんな揃ったわね。それじゃあ、出撃！」

兵「おおお……！！！」

霞とともに、待機地点へ向かう。

策としては、華雄さんが敵と当たったらすぐ反転して、谷へ向かう。それを追いかけてきた敵を伏兵で倒す。

と言う、なんとも簡単な策だ。

霞「そろそろ待機地点やね。」

「何もなければ、此処まで来た賊を、恋さんの部隊と挟撃。…だよ  
ね？」

霞「何もって何があんねん。」

「華雄さんの突撃…。」

霞「…確かにな…。」

すると…

兵「伝令！華雄將軍が突撃しました！」

「何で悪い方の予感はあるのかなあ…。」

霞「しゃーない。ウチらも出んで！」

兵「は！」

「了解。念のため、僕に近付かないで。」

霞「何でや？」

「コイツを使いたいから。」

そう言って龍を出す。

霞「そつか。じゃあ近付かん方がええな。」

「ああ。よろしく。」

霞「よっしゃ！みんな！出撃すんで！」

兵「おおおお………！」

賊「でりゃああああ………！」

兵「おりゃああああ………！」

「さて。」

大きく息をすい、

「遠き者は音に聞け！近き者は目にも見よ！我は董卓軍、天の御使  
い、鐘金城淵！今より賊を駆逐する！」

賊頭「なにが天の御使いだ！殺つちまえ！」

賊全「おおおお………！」

「はああああ………！」

僕は龍を出現させ、賊を蹴散らす。

賊1「ぐわぁ！」

賊2「何じゃありゃ！」

賊3「本体を狙え！」

賊全「うおおおお……！」

「甘い！」

龍の出てる剣を振る。

振る度に人を殺している感覚が、体を貫く。  
胃が逆さになるのを感じる。

「ぐっ……！（これに耐えないと。）」

賊頭「何やってんだ！早くあいつを殺せ！」

賊4「お頭あ、そんなこと言っただって……。」

「お前が頭か？」

そう言い、剣を突き付ける。

賊頭「だったら何だっただ！」

「そうなら殺すまで」

そう言い放ち剣を振る。

賊頭「おりゃあ！」

賊頭は、僕の剣を弾く。

華雄さんと、同じ方法を使い、賊頭の首を胴から離れ離れにする。

「…賊の頭目、討ち取った！」

賊5「かつ、頭がやられた！」

賊6「みんな！逃げろ！」

賊が引いていく。

霞「やったな、賊の頭を討つなんて。」

「そうだね…。」

霞「どないした？暗いけど？」

「ここまでしつかり人を切るとね…。」

霞「流石に堪えるか。」

「ああ。精神的にきつい。」

霞「人を殺すのに慣れたらあかん。慣れてもったら獣と一緒にや。」

「それに殺した人にも示しが付かない。」

霞「わかつとるやん。さあ、帰るか。」

「了解。」

こうして僕の初陣は終わった。

この後、華雄さんを見つけて、みんなでごっぴどく叱っときました。

### 3 話（後書き）

感想等お待ちしております。

## 4話

賊討伐から数日後、今、僕は机に向かって筆を走らせている。

やっているのは文官の仕事だ。

何故なら、賊討伐の次の日、詠さんからどれだけ文官の仕事ができるかテスト的なものをやらされた。

ちなみに漢文は読めるし、書けますよ。

まあ、そのテストを普通に解いていたら、合格？だったらしく、次の日から、書簡の山が大量に持つて来られた。

詠さん曰く、「文官の数が少ないの。文官をやって頂戴。」とのこと。

確かに武官は恋さんを始め、申し分ないため、四日文官をやって、一日武官をやるの、ローテーションになった。

初仕事の時、前世？で速読が出来たので、読んで約一分、考えて約四十五秒、書いて三分を普通にやったら、「ちゃんと読んでんの？」と言われたが、書き上げた書簡を見せると、納得してくれた。

そんなことで朝から仕事しております。

ふと、外を見ると、太陽がほぼ真上に来ていた。

「もう昼か…、腹減ったし、久々に自分で作るか。」

そう呟き、厨房へ向かう。

厨房に着くと、誰もいなかったので、遠慮なく使わせて貰う。

一応、料理はプロ顔負けの腕前だ。

「くくく」

鼻歌混じりに、作ってたら、

詠「誰かと思えば龍介じゃない。何やってんの？」

「見ての通り、料理作ってるんだよ。」

霞にあのことを話してから、みんなにも少し砕けた話し方になった。

詠「あんた料理出来たの？」

「ああ、向こうでは料理店で働いてたからね。…さて、出来たと。詠さんも食べる？」

詠「え？いいの？」

「はい。作ってて少し多いかな、と思いながら作ってたから。」

詠「じゃあ、遠慮なく。」

二人で食べはじめる。

詠「！…思ったより美味しいじゃない。これからも作ってよ。」

「別にいいけど、いつ作れば？」

詠「月がいつも作ってるから、月と相談して決めて。」

「了解。決めとくよ。」

昼を食べ終え、少し机仕事してから、月ちゃんの部屋に行き、昼のことを話した。

「…と言う訳で、詠さんに、これからも作って欲しいと言われたのですが…。」

月「龍介さん料理出来たんですね。以外です。」

「以外って…。ところで、いつも食事の準備ってどうしてるの？」

月「朝と夜の二回作ってます。」

「そうだったんだ。道理で美味しい訳だ。」

月「へう……。私なんてまだまだです。」

「そんなことないって。…じゃあ朝作るのお願いしていい？夜は僕が作るからさ。」

月「わかりました。…そうだ！今日の夜は二人で作りませんか？」

「そうだね。二人で作ろうか。」

その後、自分の仕事を終わらせ、厨房へ向かう。

僕が厨房に着くと月ちゃん は調理器具を準備していた。

「ゴメン！準備させて悪いね。」

月「少し早く着いただけですから、気にしないでください。」

「そっか。ところでいつもどのくらい作ってるの？」

月「えっと…、…多過ぎてわかりませんね。」

「えゝ…そんなに作ってんの？」

月「はい。恋さんが結構、食べるので。」

「ああ、成る程。」

月「それでは、作り始めましょう。」

「了解。さゝて何作ろうかなあ。」

月「そうだ！天の国の料理を作ってくださいませんか？」

「わかった。」

材料を見て、

「『生姜焼き』と、『味噌汁』にしようかな。」

二人で料理を始めてから数十分後、

「さうで、出来たつと。…すごい量だな…。」

月「少し作りすぎましたかね…。」

「大丈夫でしょう。さ、運びましょう。」

みんなの待つ食堂へ向かう。

月「お待たせしました。」

霞「遅い。待ちくたびれたわ。」

「いや、すいません、僕も作ってたら遅くなっちゃいました。」

華「ん？龍介、料理出来たのか？」

「はいー応は。」

恋「…早く食べよ。」

「それじゃあ、食べますか。」

全「いただきます！」

みんなが食べはじめる。

霞「！何やこれ！うまいな。これ龍ちゃんが作ったんか？」

「はい。僕が作りました。」

恋「…（パクパク。ガツガツ。）…。」

音「恋殿、まだまだありますぞ。」

華「なかなかうまいな。」

月「龍介さんに丸投げしちゃおうかな。」

詠「月、何言ってるの。月のほうが何倍も美味しいんだから。」

「詠さんの言う通り、月ちゃんのほうが、美味しいじゃん。」

月「へう……」

みんなが食べ終えて。

「これからは、僕が夜作ることになったのでよろしくお願いします。」

注文があつたら、日が落ちる前に僕の部屋に、何かに書いて持って来てください。材料があれば作りますから。」

詠「それって、我が儘でも大丈夫？」

「材料次第だけど、大丈夫だと思う。無理な時はすいません。」

次の日から、僕の部屋に大量の竹簡が届くようになった。

「選ぶのが大変だな…こりや。」

まあみんなには好評だけだね。

#### 4 話（後書き）

感想等お待ちしております。

## 5話（前書き）

自分で書いておきながら…

主人公ってチートだなあ…

## 5話

みんなに料理を振る舞ってから数日後、

今日、月ちゃんが朝に用事があつたらしく、僕が朝を作り、夜を月ちゃんが作ることになった。

そのため、夕方、少し暇になり、城壁に登り、夕日の絵を描いている。

前世？から絵を描くのが好きだったんだよね。特に、風景画。

ここ最近、無性に描きたくなくて描いてるんだよね。

そんで、描いてる途中…

霞「おい。龍ちゃん！何しとんのや？」

「ん？ああ、霞。夕日の絵をね。」

霞「夕日の絵？」

そう言つて、僕の手元を見る。

霞「同じ景色が二つあるみたいや。」

「そう？ありがと。…さうて、こんなもんかな。」

霞「なあ龍ちゃん、ほかのはあらへんの？」

「部屋にこんな感じの風景画が二、三枚あるけど？」

霞「ホンマに！見に行ってもええか？」

「ああいいよ。じゃあ僕の部屋に。」

霞を連れて自分の部屋へ向かう。

部屋に着き、

「えっと…こんな感じかな。」

そう言って三枚の絵を見せる。

） 龍介 side out ）

） 霞 side ）

龍「えっと…こんな感じかな。」

そう言って見せてくれたのは、朝日、町並み、星空の三枚の絵だった。

「これ、ホンマに龍ちゃんが描いたんか？」

龍「はい。どうですか？」

「いや、どれも時が止まってるみたいや…。」

その三枚の絵はどれも時を止めて描かれたかのように、精巧な、美しい絵だった。

「こんな綺麗な絵見たの、生まれて初めてや…。」

気が付いたら涙が出ていた。

〕 霞 side out 〕

〕 龍介 side 〕

霞「こんな綺麗な絵見たの、生まれ初めてや…。」

その声は震えていて、その顔には涙があった。

「えっ？えっ？…何で泣いてんの？」

霞「いや…あまりにも綺麗でな…。」

「あ、ありがとう」

霞「なあ、似顔絵は描かへんの？」

「言われれば描くけど？」

霞「ウチの絵描いてくれへん？」

「ああいいよ。じゃあ、霞が非番の日に僕の部屋に来て。そん時に描くから。」

霞「わかったで。…さあ、晩飯や！」

そう言つて二人で食堂へ向かう。

そう言えば、夜作らないの久々だったな。

次の日。朝食を食べ終え、部屋で仕事をしていると…

霞「龍ちゃん。おるか？」

「はい。いますよ。」

そう返事すると、部屋に入つて来た。

霞「午後非番やったんや。絵、描いてくれるか？」

「ん。了解。じゃあ、中庭に向かうよ。」

霞「ん？何でや？」

「霞には、少し本気で素振りをして貰いますから。」

霞「被写体が動いてええんか？」

「はい。実は特技の一つで、一瞬を脳に記憶しておくのが得意なんだ。それを使って描くから中庭って言うこと。」

霞「ふ〜ん。そっか。じゃ中庭にいい。」

画材を持って中庭へ向かう。

「えっと、じゃあ、この辺で動いてもらっていい？」

霞「了解や。」

霞が偃月刀を降り始める。

少しして、

「（よし。この瞬間にしよう。）霞、もう大丈夫だよ。」

霞「もうええんか？」

「ああ。それじゃ少し待ってて。」

そう言って、描き始める。

＼ 龍介 side out ＼

＼ 霞 side ＼

偃月刀をしまつて、龍ちゃんの隣に座る。

龍ちゃんの顔をちらつと見て、ある言葉が頭をよぎつた。

「（龍ちゃんって、かっこええなあ）」

と、心のなかで呟いた。

＼ 霞 side out ＼

＼ 龍介 side ＼

「…よし。こんな感じかな。」

そう呟き、隣に居る霞をみる。

「寝ちゃってる。」

霞は座りながら寝ていた。

「まあいいや。起きんの、待ってよ。」

寝辛そうなので、少し体を動かし、自分の膝の上に霞の頭を乗せる。  
少ししたら、

霞「う…ん…。ん？」

「おはよー。」

霞「ありゃ？寝とった？」

「うん。寝辛そうだったから横にしたけど。」

霞「へ？…あつ！ス、スマン！膝、枕にしとったんか！？」

霞は顔を赤くして飛び起きる。

「謝んなくても…横にしたのは、僕なんだから。…それと絵、完成したよ。」

霞「ホンマか！見して、見して！」

「はい。」

霞に描いた絵を渡す。  
すると霞が、

霞「なあ、これホンマにウチか？」

「そのつもりだけど？」

霞「ウチってこんなに美人か？」

「そう思いますが？」

霞「そっか。ありがとうな。これ貰ってええ？」

「もちろん。人物画の時はいつもあげてるからね。」

霞「そっか。…せや。これお礼や。」

そう言っただけは、お金を出すそぶりする。

「いいよ、お代なんー」

断ろうとしたら霞が

キスをしてきた

霞「…………へへっ。ありがとうな。」

そう言って中庭を去っていく。

「……? ……? ……」  
（混乱中）

我にかえり、

「な、何で…」

我にかえつても、霞が好意を寄せている事に、気づかない龍介だった。

## 5 話（後書き）

感想等お待ちしております。

次はいつ更新できるんだろ…

## 6話（前書き）

今回、キャラ崩壊注意報発令します。

今更ながら

いつのまにか2万PV突破！

## 6話

霞の絵を描いてから数日後、

とうとう、漢皇帝・霊帝が崩御した。

霊帝が死んでから、後継ぎとして、大將軍・何進の鶴の一声？により、弁太子が即位して少帝となり、このまま何事もなく、終わった

かに見えた。

少帝を快く思わなかった劉協派の十常侍達が、何進を呼び出し、そこで暗殺した。

それに激昂した何進の部下達は、十常侍達を筆頭とした、劉協派の人物を次々に虐殺していった。

自身に戦う力のない残った十常侍達は、僕ら、董卓軍に助けを求めた。

最初こそ、協力していたが、我らが軍師、賈馮文和の計略により、残りの十常侍達を殺した。しかし、一部殺し逃してしまった。

それでも裏切りは裏切り。董卓の風評は、下がっていった。

そこで発せられた袁紹による反董卓連合の檄文

今わかつている限りでも、名門・袁家の袁紹・袁術を始め、乱世の奸雄・曹操、江東の小霸王・孫策、北方の雄・公孫瓚、平原の相・劉備、その他、有象無象の人物が参加を表明していた。

僕らは、対連合軍戦に向け、軍議を開いた。

そこで月ちゃんが、

月「皆さん、私のせいで…、ごめんなさい。」

今にも涙が溢れ出しそうな声で言う。

そこへみんなが、

霞「何をゆうてんねん。ウチらは月が善政してんの、知っとるし。」

華「張遼の言う通り、董卓様は悪くない。」

呂「…月、悪くない。」

音「恋殿の言う通りですぞ。」

みんなの言葉に、

月「ありがとうございます…。」

涙をこぼしながら言う月ちゃんに

「泣くな。みんなは月ちゃんのそんな顔が見たいんじゃない。笑ってる顔が見たいんだからさ。」

僕はそう声をかける。

月「そうですね…。ありがとうございます。」

そう言って笑顔を見せてくれる。

ふと詠さんを見ると

詠「……………」

声を殺し、泣いていた。

「詠さん。何、泣いてんの。月ちゃんにも言ったこと、詠さんにも当て嵌まるんだよ。」

詠「そんな訳ない！」

叫ぶ詠さん。

詠「今の状況になったのはボクのせいなのよ！そのせいでみんなに迷惑か…「迷惑なんかじゃない。」…何だよ。」

「詠さんは、月ちゃんのために思ってやったんでしょ？そんなことみんなわかってるつもりだし、もし、違うのなら僕らがいくらでも相談に乗るし、愚痴も聞く。仲間でしょ？仲間なら、辛さや悩みとかを分かち合おうよ。一人で悩まないでさ。」

そう言つて詠さんの頭を撫でる。

「泣きたいときは泣けばいい。一人が嫌なら誰かに受け止めて貰えばいいんだよ。」

詠「う、うわわわわん！」

詠さんは僕に体重を預けて、今まで溜め続けたものを吐き出すように、泣いていた。

「落ち着きました？」

詠「ええ…、ありがとう、龍介。」

泣き止んだ詠さんに声をかける。

詠「…さあ、軍議を始めましょう。」

その一声によりみんなの顔が真剣になった。

詠「今回の策なんだけど、相手の総大将は、おそらく袁紹だから、  
巳水関、虎牢関の最短の道で来ると思うの。」

全「確かに…。」

なんか別の意味で信用されてるよ。袁紹。

詠「それで将の配置なんだけど、…龍介、あんただったらどうする  
？」

何故僕に振る？と思いつつ、

「うーん、巳水関には僕と華雄さんで、虎牢関に霞と恋さん、ねね  
ちゃん。かなあ。」

ぶっちゃけ、原作と同じだ。

詠「ボクとほとんどいっしょか。ならそうしよう。」

あら、すんなり通っちゃったけど、いいのかなあ？

その後細かい兵数等を話し合い、軍議は終了した。

軍議が終わり、その部屋を出るとき、霞に呼び止められた。

霞「今回の華雄の重りよろしくな。」

ん？どういうこと？

霞「おそらく敵さんは、華雄を挑発して来ると思っねん。華雄はあの性格やから…、何とか抑えてな。」

うわ…。忘れてた…。

「自身無いけど、頑張って見ます…。」

どうしょ。戦のまえから不安しかないぜ。

## 6 話（後書き）

今回、下書きほとんど無視して書き上げました。

なので誤字等の報告、並びに、感想等お待ちしております。

## 7話（前書き）

なんか進みが早い気が…

巳水関の『巳』は本来、『さんずいに巳』です。ケータイのため変換できませんでした。

いつのまにか、3万PV突破

## 7話

僕は今、城壁の上から連合軍の様子を伺っている。

とうとう来ましたよ。巳水関当日。華雄さん、大丈夫かなあ…。

「うわゝ。たくさんいんな〜。」

霞「ホンマやね…。」

赤、青、緑、金など、ゲーム見たいに色が分けられていてわかりやすい。

主に金。…袁紹だろうなあ…。

そこへ、

華「龍介！何をほうけている！早く準備しないか！」

「準備つて…、打って出る訳じゃないんだから…。」

華「何？打って出ないのか？」

霞「はあ…。あんた、詠の話理解してる？」

「僕らのいる理由は、あくまでも詠さんの策を成功させるための時間稼ぎ、突撃なんてしたら時間稼ぎどころじゃない。」

霞「せやで。だからあんたはいつまでも猪って呼ばれるねんで。」

華「うつ…。」

「そんなに突撃したいなら、僕を軽くあしらう武があつて、ようやく許可がおりるぐらいかな。」

華「……………」

少し肩を落とす華雄さん。

霞「はあ…。もう帰んで。龍介、華雄をよろしくな。」

「了解です。」

ああ…。霞が帰ってしまった…。

ん？敵に動きが…。先鋒の兵は緑。おそらく、劉備さん達でしょうね。

お！なんか二人、出て来た。…ああ、僕らを関から出すための挑発ですね。臆病やら、亀やら、何やらかんやら。

まあ、僕は何と罵られてもいいんですがね。

ふと、横を見ると…

華「ぐぐぐ…！もう勘弁ならん！お前ら打って出るぞ！」

「ちよつと待ったあ！何言つてんのぉ！」

今にも飛び出しそうな、華雄さんを引き止める。

華「放せー！あそこまで自身の武を虚仮にされて、悔しくないのか！」

「僕は武を誇ってる訳じゃないし、ああいう悪口は言われ慣れてるし、絶対畏だから…ってあれ？華雄さん！？」

兵「大変です！華雄將軍が突撃しました！」

「はあ！？あんの猪い！もういい！お前は兵をまとめて、虎牢関まで退いて！あと、弓兵三十人くらい残しといて、華雄さんが戻ったら、僕は戻ってなくてもいいから巳水関に火を放って！」

兵「御使い様はどうするのですか！？」

「僕のことは考えないでいいから！早くして！」

兵「わ、わかりました。」

そう言って兵が駆けていく。

…さて、あの猪を捕らえに行きますかね。

） 龍介 side out ）

） 華雄 side ）

ふっ…。一般兵など造作もない。  
もっと骨のある奴はいないのか。

？「待て！貴様が華雄だな。」

「いかにも。私が華雄だ。」

？「私は、平原の相、劉備軍が一の矛、関羽雲長！手合わせ願う！」  
そう言つと、偃月刀を振ってくる。

「ぐっ…！確かにできるようだ。この華雄、本気で逝く！」  
少しして。

「ハア…ハア…。」

関「ふっ…。さっきまでは威勢がよかったが、どうした？」

「ぐっ…！言わせておけば…！」

関「そろそろ終いにしよう。」

そう言つて私の首めかけ、偃月刀を振ってくる。

「ぐっ…！がっ…！」

かろうじて避けるが、肩に当たってしまった。

関「これで…最後だ！」

関羽はまた、私の首めがけ、偃月刀を振ってきた。

私はもう駄目だ、と思い目をつむる。

しかし、いつまで待っても、痛みが来ない。

恐る恐る目を開ける。

そこには、見知った男の背中があつた。

〕 華雄      s i d e      o u t      〕

〕 龍介      s i d e      〕

あぶねー！あと少しで華雄さん死ぬところだったよ！

「華雄さん！僕の乗ってきた馬に乗って、虎牢関に戻ってください！」

有無を言わず華雄さんを、馬に乗せる。

華「すつすまない。」

華雄さんを後ろ目に、関羽さんに向き直る。

「さて…、華雄さんが逃げ切るまで、僕が相手をします！僕は、鍾金！字は、城淵！巳水関を守るもう一人の将！そして、董卓軍に降り立った、天の御使いです！」

そう大音声を上げる。

関「そうか。貴様がもう一人の御使いか。…その首、貰い受ける！」

関羽さんが、青龍偃月刀を振ってくる。

僕はそれを、弾く。

関「ぐっ…！やはり華雄よりできるみたいだな。本気で逝く！」

関羽さんと本気で打ち合い始める。

少ししたら、巳水関から火の手が上がる。

「よし。華雄さんは逃げ切ったみたいだな。僕も退きますか。」

関「させるか！」

「少し寝てて貰いましょう。」

そう言って関羽さんの背後に回る。

（ 龍介 side out ）

（ ??? side ）

鍾「少し寝てて貰いましょう。」

そう言ったら鍾金が消えた。

愛「どこだ！どこに…（ビシッ！）…がっ！（ドサッ）」

鍾「ふう。さて、そこにいる朱色の槍を持った人。連れて帰ってくださいね。」

そう言うと、鍾金は火の手が上がる巳水関へと、入っていった。

「ほう。私を見抜くとは、ただ者ではないな。」

申し遅れた。私は姓を趙、名を雲、字を子龍と言う。

まあいい。愛沙を連れて帰りますか。

） 趙雲 side out ）

連合軍は焼け野原同前の巳水関を足場にできなかった。

## 7 話（後書き）

感想等お待ちしております。

## 8話（前書き）

とうとうPSPの恋姫夢想買ったちゃいました！

ちなみに呉編です（＾－＾）v

## 8 話

何とか着きました、虎牢関。

「おい。開けてくれ。」

霞「誰や…って龍介！何で生きてるん！？」

「何でって、生きてるんだから。」

霞「だってな、華雄や兵達が言うには、『自分のことは気にせず巴水関に火を放って』って、いったらしいやんか。」

「確かに言っただけど、何で死んだことになる。」

霞「人が火の中を通れる訳無いし、それに関羽と戦ったんやろ？」

「確かにそうだけど…。」

詠「霞、誰と話して…って龍介！生きてんの！？」

「みんなの中で、僕は死んだのね。」

詠「そりやそうよ。人が火の中を通れる訳無いし…。」

「普通の人だね。僕だったから大丈夫だったんだよ。」

詠「はあ？どういうことよ？」

「それは、みんなの前で説明するよ。だから、みんなと合わせくない？」

詠「わかったわ。絶対説明しなさいよ。」

「わかってるよ。」

みんなに会ったら、恋さんと、ねねちゃんには飛び付かれ、月ちゃんは何故か涙を流していた。華雄さんには、すごい勢いで謝られた。

詠「さあ、説明して貰おうじゃない。何で火の中を通れたか。」

「結論から言うと、僕の氣の性質が『水』だったからなんだ。」

霞「氣の性質が『水』？どういうことじゃ？」

「氣には『火』『水』『土』『雷』『風』の五つの性質があつて、たまたま僕の氣の性質が水だったんだよ。まあ、この性質を思い出したのは、巳水関に行く途中だったんだけどね。だから火の中を通れたわけ。」

詠「なんか信じにくいわね。」

「それじゃあ、実演しますよ。」

そう言つて、落ち葉などの燃えやすいものを集める。

「よし。これくらいあればいいかな。それじゃ火を起こしますね」

普通に火を起こす。

夕御飯を作るときで慣れたものだ。

「それじゃあ、手、入れますよ」

手に氣を纏わせ、火に突っ込む。

） 龍介 s i d e o u t ）

） 詠 s i d e ）

龍「それじゃあ、手、入れますよ」

龍介は、普通に火に手を突っ込んだ。

「ちよつ！龍介！…大丈夫なの？」

龍「ああ。大丈夫だよ。…ほらね」

龍介は火の中から手を出す。

火傷一つない。

「本当に何も無いのね…。」

霞「何やねん…、その能力…。」

華「こんなこと…有り得るのか？」

月「目の前に有り得てますしね。」

恋「…龍介、すごい。」

音「すごいと言う次元じゃないのです。」

改めて思う。…本当、龍介って何者？

） 詠 side out ）

） 龍介 side ）

自分の氣について説明したあと、詠さんが、

詠「ところで、何で巳水関を燃やしたの？」

「連合軍の足場にさせないため。」

詠「はあゝ。よく思いついたわね。」

そんなこと話していると…

兵「連合軍が巳水関を出ました！」

詠「わかったわ。じゃあ、各隊、準備しなさい！」

全「応！！」

「そうだ！月ちゃんと詠さんは、洛陽に向かってくれない？」

詠「え？何で？」

「もし、虎牢関を抜かれたら、安全なうちに着くようにね。」

詠「…わかった。その通りにしましょう。」

「華雄さんは月ちゃん達の護衛として一緒に行ってくれない？」

華「何故だ！？」

「巳水関での怪我治ってないでしょ？」

華「何を言う！私はまだ戦える！」

「そんな強がり、言える？」

華雄さんの、傷口に触れる。

華「！！！」

華雄さんは、声にならない叫びをあげる。

「さすがに無理っしょ。前線に出るのは。」

霞「龍ちゃんの言う通りやで。華雄。」

華「確かにそうみたいだな…。」

「じゃあ、月ちゃん達をよろしくね。」

華「応。」

こうして、月ちゃん達と別れ、虎牢関の戦いが始まる。

## 8 話（後書き）

感想等お待ちしております。

## 9 話（前書き）

更新遅くなりました。

申しわけありません。

あと、袁紹好きの人すいません。扱いがひどいです。

## 9 話

「……………一つ聞いていい？袁紹の頭の中はお花畑なの？」

霞「そうやなきや、あんなふうにつっ込んでこんやろ…。」

こんなことを霞と話す。

理由は連合軍の先鋒の金色装備の兵達。

改めて……………袁紹って本当にクルクルパーだな。

「こんなバカ共に、月ちゃんが苦勞させられるとは…。向かつ腹が立つ…。」

霞「あゝもう！華雄や無いけど突っ込みたいわ…。」

「不謹慎なこと言わないでよ。巳水関みたいな失敗、したくないよ。」

霞「わかつとるけど…。」

「わかっているならいいんだけど。…龍使いたい…。」

霞「そっちのほうアカン！そっちのほうが！」

「ですよね…。」

なんて話していると…

音「何を二人してのんびりしとるのですか！敵はすぐ目の前にいるのですぞ！」

「そんなに慌てなくても大丈夫だよ。…だって、あの『迷』家が先鋒じゃん。」

字が違う気がするけど気にしない。気にしたら負けです。

霞「そうやで。そんなに気張っとったら、軀が持たんよ。」

音「それでものんびりしすぎです！」

と、怒るねねちゃん。

「大丈夫だよ。もし危なくなったら、僕がみんなを守るからさ。」

と、言つてのける。すると、

霞「ほ。言ってくれるやん。」

音「恋殿が居れば平気なのですぞ！」

という反応が帰ってきた。

音「…それでは、ねねは、恋殿の所に戻りますぞ。」

そう言つて恋さんの所に戻っていった。

「…さて、どう攻めてくるかな。」

霞「ホンマやね…。…って、考える必要ないみたいやで。」

「…本当だ。こんなんに、策を使うのがもったいない気が…。」

なぜなら、ただ突っ込んで来たただけだからだ。

「おっ！引いた！…まあ当たり前だけどね。」

そこに…

兵「大変です！！呂布將軍が突撃しました！！」

霞「なんやて！！あゝもう！！ウチらの軍には猪しかおらんのか！！」

「このままだと巳水関の二の舞になる！早く準備して恋さんを引き戻そう！」

霞「ああ！みんな早う準備し！」

「あと伝令！洛陽にいる詠さんに、この一部始終を伝えて！」

兵「了解しました！」

霞「じゃあ、龍ちゃん打って出んで！」

「応！」

死なないでよ。恋さん。

〕 龍介 side out 〕

〕 恋 side 〕

関「くっ！…。私達三人が…」

張「束になっても…」

趙「勝てないとは…」

「…そんなことない。…三人とも強い。…けど、恋のほうがもっと強い。」

自分が思ったことを口にする。

そこに…

兵「伝令！敵の軍が虎牢関に侵入！間もなく落とされる可能性が…」

「…！………ねね。」

音「ぐう…仕方ないのです！全軍撤退しますぞ。」

早くしないと家族が……

〕 恋 side out 〕

〕 龍介 side 〕

敵兵「うおおお……!!」

「あゝもう！雑兵多過ぎ！」

と、愚痴りながらも敵兵の命を刈り取っていく。

そこに…

？「貴方が、鍾金？」

と言われたので、

「はい。僕が鍾金城淵です。以後御見知り置きを。」

と返した。

？「あ、うん。私は孫策伯符よ。よろしくね。」

？「策殿…乗せられておるぞ…」

孫「いや、思いの外、丁寧だったんだもん…。」

『だもん』って…一応、敵ですよ。

？「策殿、一応敵じゃぞ…。」

この人とは気が合いそうだなあ。

孫「細かいことは気にしない！…さて、鍾金？ここは戦場、そして私とあなたは敵同士。…わかるわよね。」

「個人的にはわかりたくないですけど…。…仕方ないですね。殺りますか…。」

孫「話しが早くて助かるわ。…さて殺り合いましょう！」

？「ちよつと待ってくれ！鍾金、おぬし、火の手が上がる巳水閣に入っていったのではないか？何故火傷一つないのじゃ？」

「その前に、貴女のお名前は…？」

？「儂か？儂は黄蓋字は公覆じゃ。さて質問に答えて貰おうか。」

「あれはですね……………（龍介説明中。忘れた人は8話参照）……………と、いうことです。」

（私の怠慢です。気にしないでくれると有り難いです。by作者）  
ん？何か聞こえましたけど気にしないほうがいいですね。

黄「…にわかに信じ難いが、本人がそう言うならそうなのじゃろ。」

孫「さて、黄蓋の質問も終わつたし…早くしましょ。」

「やっぱ忘れてませんか…。…仕方ない…。」

そう言つて武器を構える。

「そつちから、どうぞ。」

孫「なめられたものね…じゃあ、遠慮なく！」

孫策さんが剣を振ってくる。

それをかわして、孫策さんに向け剣を振う。

孫「！！…危ないわねえ。」

「軽々避けといてそれはないでしょ…。」

孫「やっぱりわかる…じゃあ本気でいくわ。貴方も本気で来なさい！」

「結構、本気なんですけど…。」

本気で打ち合い始めて少ししたら…

「はあ……はあ……。きつつ。」

孫「ハア…ハア…。お互い様よ。」

流石は『江東の小霸王』…強い…。

そこに…

兵「伝令…！虎牢関が間もなく落ちそうです…！」

「そつか…。じゃあ、兵のみんなにこう伝えて。離脱、もしくは降伏しろ、と。決して、死ぬんじゃない、って。」

兵「御使い様は、いったいどうするのですか？」

「僕のことは気にしないでいいから、早く行って。手遅れになる。」

兵「わ、わかりました。」

兵が駆け去っていく。

孫「それで…、…貴方はどうするの？」

「そうですね…」

少し考えて、

「もし、宜しければ、孫策殿の所に降らせていただだけませんか？」

） 龍介      s i d e      ）

） 孫策      s i d e      ）

鍾「もし、宜しければ、孫策殿の所に降らせていただけませんか？」

思ってもない願い出だった。

自分の所に、一騎当千の将がくるのだから拒む理由がない。

鍾「あと、一つだけ、お願いがございます。」

「その願いとは？」

鍾「私を洛陽へ向かわせてください。」

「願いはそれだけ？」

鍾「はい。」

「…わかったわ。許可しましょう。」

すると…

祭「策殿、いいのか？」

と、祭が聞いてくる。

「大丈夫、絶対戻ってくる。そうでしょ？」

） 孫策    s i d e    o u t    ）

） 龍介    s i d e    ）

孫「大丈夫、絶対戻ってくる。そうでしょ？」

何か信頼されてる？

「はい。必ず。」

こう答えなきゃ殺される気が…

「それでは、失礼します。」

そう言って洛陽へ向かう。

## 9 話（後書き）

感想等お待ちしております。

## 10話（前書き）

年内ラストの更新っす!!!

ではござい！

## 10話

やっと着きましたよ。洛陽。

移動中に聞いた情報によると、霞は曹操さんの所に捕まっていて、恋さんは既に戦線を離脱してたらしい。

「（まあ、みんな死んでなくてよかったけど…。）」

なんて考えながら月ちゃん達を探す。

「どこに、いるのでしょうかねえ…。」

さっぱり検討がつかん。

「…考えても思い付かん。虱潰しに探しますか。」

居そうな所を回ってく。

探しはじめて、約三十分。

月「龍介さん!!」

やっと見つけました。

月「無事でよかったです。」

詠「まあ、よかったんじゃない。」

「ありがと。…時間がなさそうだから、質問するけど、孫策、劉備、曹操。この三人の中で、降るなら誰がいい？」

詠「なっ！何言って……もしかしてそういうこと？」

「多分、詠さんが思ってることだと思う。」

詠「それってかなり危険じゃない？」

「確かに危険な賭けだけど、これがみんな無事で行けると思うんだ。」

すると、

月「詠ちゃん、龍介さん、どういうことですか？」

華「???」

二人はわかっていなかった。

「今挙げた三人は、月ちゃん達を匿ってくれそうな三人なんだ。その降る先を、月ちゃん達には自分の意思で決めて欲しいんだ。」

月「龍介さんはどこに降るんですか？」

「それは後だね。自分で決めないと、この先、絶対後悔するから。」

月「解りました。…華雄さん、詠ちゃんはどうする？」

「個人的には自分の行きたい所を選んで欲しいけど。」

詠「ボクは月が、行きたい所なら何処でもいいよ。」

華「私も同じく。」

「後悔しないなら、いいんだけどね。…さて、月ちゃん。何処にする？」

月「それなら…劉備さんの所へ、お願いします。」

「ん、了解。…この辺で待ってて。」

じゃあ、劉備さんの所に交渉しに行ってきますか。

） 龍介 side out ）

） 関羽 side ）

私はこれから洛陽へ向かう準備をしている。

「さて、こんなものだろう。」

と、呟いた。

そこに…

？「関羽將軍ですね？」

「誰だ！」

？「お久しぶりで……………危なっ！！」

そこにいたのは鍾金だった。

「貴様が何故ここにいる！」

鍾「貴女方の声名を上げに来ました。」

「何？」

私はその話しが気になり、聞いてみることにした。

） 関羽      s i d e      ）

） 鍾金      s i d e      ）

よかった。話しは聞いてくれるみたい。

関「そこで待っている。今、君主二人を連れてくる。」

「解りました。」

関「一応、兵は付けさせ貰うぞ。」

兵を二人、哨としておいて、関羽さんは走り去って行った。

哨となった兵と雑談しながら待っていると、

関「ずいぶんと暢気だな。」

関羽さんが、とある三人を連れ、戻ってきた。

「成るようにしか成りませんからね。」

関「ふっ…。成る程。」

「…それでは、お話させて頂きます。」

急に口調を変えてしゃべり出す。

それと同時に他の人の顔にも緊張が走る。

「皆さん。董卓様の悪政の事実はございません。すべては袁紹の戯れ事です。」

その言葉に全員が驚く。

ただ一人を除いて。

関「そんな証拠が何処にある!!」

関羽さんが声を荒げる。

「その軍の将軍が言っているのですから…。それに、その小さいお嬢さんも、気付いてたみたいですね。諸葛孔明殿？」

僕はそう言つて、小さいお嬢さんーもとい、諸葛亮孔明に手の先を向ける。

諸「な、なんで私の名前を…。」

「今のご時世、情報が武器になりますから。……まあ、僕も天の御使いの端くれです。天の知識とってください。」

劉備軍の人達が納得いかない顔をする。

「何故皆さん納得いかない顔を？特に天の御使い、北郷殿？」

北「…貴方が本当に御使いなら、この戦いに負けることは、わかっていたはず。…それなのに董卓側にいる、それは何故ですか？」

「確かに、僕達の世界なら、董卓は悪政をしている。…この世界は、あつちの世界とは違う。劉備殿や、関羽殿達に会ってわかったことでしょう。」

北「!…なら、董卓も…。」

「その通り。儂く、可愛らしい方です。…悪政なんて言葉とは程遠い、いや、虫一匹殺せなさそうな方です。」

北「じゃあ、この戦いは…」

「あの駄名家・袁紹の勝手な逆恨みでしょう。」

劉「そ、そんな…」

「それが事実なんですよ。劉備殿。……そこで、貴女方にお願いがございます。…董卓様達を匿って頂けないでしょうか？」

劉「悪政が嘘なら、喜んで引き受けたいのですが…。どうかな？朱里ちゃん？」

諸「そう…ですね…。しかし、匿えて三人ですかね…。」

「大丈夫です。匿って欲しいのは三人です。」

諸「その三人とは…？」

「先ず、董卓様。次に軍師・賈馮殿。そして、將軍・華雄殿。この三人です。」

劉「あれ？鍾金さんは？」

「僕は孫策さんの軍に降らせて頂きました。なので、数えて頂かなくて、結構です。」

劉「そうですか。解りました。」

「策等は、そちらにお任せいたします。投げやりで申し訳ありません。…それでは、失礼します。」

踵を返し、その場から立ち去る。

その後、僕は洛陽に戻って月ちゃん達に、劉備殿の軍に降れると伝えて、その場を後にした。

今僕は、洛陽を出て、孫策さん達の陣地に着いた所だ。

「あのく、孫策殿に合わせて頂けないでしょうか？」

哨の兵に話しかける

兵「貴様！何者だ！」

「鍾金城淵ですが。何か問題でも？」

兵「わかった。そこで待っている。」

案外すんなり話を通る。

しばらくして、陣の奥から、孫策殿、黄蓋殿、あともう一人、出てくる。

？「本当に大丈夫なのか？」

孫「大丈夫だって。冥琳は心配しすぎなのよ。」

「孫策殿、この方は…。」

？「周瑜、字を公瑾と言う。」

「周瑜様ですね。よろしく願いしますます。」

周「よろしくするかどうかは貴様次第だ。」

孫「もう、冥琳はお固いんだから…。」

「孫策様が軽すぎるのでは？」

孫「なんでよ。」

「いや、周瑜様のように警戒するのが普通ですから。」

黄「お主、信じて貰う気があるのか？」

「ありますよ。一応は。」

黄「一応とは何じゃ。一応とは。」

「いや、ゆっくり溶け込めたらいいなあ、と考えていたので。」

孫「…それじゃ、みんなに会って貰おうかしら。こっちきて。」

孫策様達に連れられてきたのは、とある天幕だった。

孫「少し待ってなさい。今いる味方を連れてくるから。」

そういつて天幕を出ていった。

少ししたら、孫策様が数人連れて戻ってきた。

孫「じゃあ、自己紹介をやって貰いませよ。鍾金からよろしく。」

「只今、ご紹介に預かりました。元・董卓軍天の御使い、姓を鍾、名を金、字を城淵、真名を龍介といいます。皆様に僕の真名をお預けいたします。これからよろしくお願いします。」

と言って、頭を下げる

孫「じゃあ、次は私達ね。…改めて、私は姓を孫、名を策、字を伯付、真名は…「真名は完全に僕を信用できると思ったら預けてください。」…わかったわ。」

周「私も改めて、姓を周、名を瑜、字は公瑾と言う。」

黄「儂も改めて、姓を黄、名を蓋、字は公覆と言う。以後見知り置け。」

？「私は、姓を孫、名を権、字は仲謀だ。…姉様は認めてもわたしは認めないからな。」

？「私は、姓を甘、名を寧、字は興霸だ。私も孫権様同様、貴様を

認めはしない。」

？「私は、姓を周、名を泰、字は幼平です。これからよろしく願います。」

？「私は、姓を陸、名を遜、字は伯言です。」

策「あと妹が一人いるんだけど。…これからよろしくね。」

「こちらこそ、よろしくお願いします。」

こうして、無事、僕は孫呉の家臣（？）になった。

## 10話（後書き）

感想等お待ちしております！

## 11話（前書き）

約一ヶ月ぶりの投稿です。

今更ながら、明けておめでとうございます。

では、本編をどうぞ！

## 11話

僕が孫策様の所に降った後、連合軍は洛陽への進攻を開始した。

そして、董卓は劉備軍が討ち取ったと言う、噂が轟いた。

無論、本当に殺してはいないだろう。

そうでもしないと、袁紹辺りに狙われるからだろうと思う。

「まあ…当然の結果かな。」

と、一人で呟いた――

策「何が当然の結果？」

――つもりだったが、孫策様達に聞かれていたらしい。

「ああ、孫策様。…いや、董卓軍が負けることです。」

周「そういえばお前も、天の御使いだったな。…負けるとわかっていて、何故董卓軍にいたのだ？」

「もし、董卓様が本当に暴政してたのなら、僕は連合側にいたでしょう。…僕がいた世界とは少々違ったので、董卓側に着いたのです。」

歴史を変えてみたくてですね、と付け足す。

黄「何故に、そんな危険な賭けをしたのじゃ？」

「うん。出来心ですかね。」

三人は呆れた顔をした。

周「……………そういえば、董卓軍にいた時、どんな仕事してたのだ？」

いち早く我に帰った周瑜様が僕に問う。

「えっと、文武官兼料理人でした。」

策「文武官は分かるけど、料理人って何よ？」

「董卓軍の将は仲が良くて、朝と夜は董卓様と僕で作ってたのです。なので、あえて料理人と言わせて頂きました。」

策「じゃあさ、お昼作ってよ！」

「僕はいいですけど…入ったばかりの僕でいいんですか？」

周「構わん。…といたいところだが、監視を付けさせて貰うぞ。まだお前を信用してない者が居るのでな。」

「それぐらいなら構いません。…それじゃあ、厨房へ案内してくれますか？」

策「わかったわ。ついて来て。」

孫策様に連れられて厨房へ行く。

そして、監視付きで料理を始めた。

「お待たせしました。」

権「何故貴様が料理を持つてくる！」

「孫策様に作ってくれと言われたので。」

権「なっ！本当ですか！姉様！」

策「本当よ。だから落ち着きなさい。…それにしても、美味しそうね。流石、料理人を自称するだけはあるわね。」

「有り難いお言葉です。」

権「……………」

策「蓮華？どうかした？」

権「私はまだコイツを信用出来ないのです。」

周「大丈夫ですよ、蓮華様。怪しい物は何一つ入ってないそうです。」

「

その言葉を聞いて孫権様は渋々食べる気になったらしい。

策「それじゃあ、食べ始めましょ。」

孫策様のこの言葉を皮切りに、みんなが食べ始めた。

黄「ほう。これは中々。」

周「これは、美味しいな。」

権「これは…。」

甘「…美味しいな。」

周「これは美味しいです。」

陸「美味しいですね。」

「喜んでいただけ何よりです。」

僕の料理は、中々好評だった。

食事の後で、孫策様、周瑜様、黄蓋殿、陸遜さんから、真名を受け取った。

料理で認められるって…どうなんだろう？

## 11話（後書き）

感想等、お待ちしております。

## 12話（前書き）

前回よろしく短めです。

では、ごうぞー！

## 12話

雪蓮様達にお昼を作った次の日、連合軍は解散となり、それぞれの領地へと帰る準備を始めた。

「うーん、やることないなあ。」

自分は降った身なので、ほとんどやることはない。

「何か手伝えばいいんだけどなあ。」

祭「どうしたのじゃ？手持ち無沙汰か？」

「はい、まあ。」

祭「それなら少し話しに付き合ってくれんか？」

「はい。いいですよ。」

祭「お主の噂のことなのじゃが、何故『龍を従える剣士』なんて呼ばれておるんじゃ？」

「ああ、こういうことです。」

剣を抜き、氣を纏わせ、龍を出す。

祭「…な、成る程、だから龍を従える剣士か。」

「まあ、そういうことですね。」

雪「龍介、今の何。」

「僕の異名のことですよ。」

祭「噂であつたじゃろ、董卓軍には龍を従える剣士がおる、とな。」

雪「あゝ、そういえばあつたわね。そんな噂。」

祭「そんなもんを賊に見せたら、すぐさま逃げそうじゃな。」

「そうじゃないから、そんな異名が出るんですよ。」

祭「はっはっは！ 違うない。」

雪「ところで龍介、虎牢関で話してた氣のこと。本当なの？」

「本当ですよ。じゃあ実演しますか？」

その辺にあつた枯れ枝とかを集め、火を起こす。

「それじゃあ、入れますよ。」

起こした火に手をつ突つ込む。

二人「！！」

祭「大丈夫なのか！？」

「大丈夫ですよ。…ほら。」

火から手を抜いて、見せる。

祭「…本当じゃ。」

雪「龍介って本当、すごいわね…。」

少し雪蓮様達と雑談していると、

冥「おい。そろそろ出発するぞ。」

雪「わかったわ。それじゃ、出発するわよ。」

冥「そうだ、龍介は建業に着いたら私について来てくれ。どれほど、文官の仕事ができるかみたいからな。」

「解りました。やったね！久々の机仕事だ！」

雪「なんでそんなに喜べるのよ。」

「文官のほうが好きですもん。基本、文官体質ですから。」

冥「雪蓮にも見習ってほしいものだな。」

雪「あ、あはは、何のことかな？」

「冥琳様、苦勞しているんですね…。」

冥「わかってくれるか、有り難い。」

「僕は董卓軍じゃあ冥琳様のような苦勞していたので…。…ここではないと思ってましたよ。」

冥「残念ながら二人も問題児が居るからな。」

横目で雪蓮様と祭さんを見る冥琳様。

「まあ、何処にもサボリ癖のある人は居るんですね…。」

冥「…ああ。まあ、これからよろしくな。」

「了解です。」

何が了解かは言わずもがな。

雪「冥琳と龍介ってば、二人揃ってひどい。」

冥「そう言われるのが嫌なら、真面目にやってくれ。」

ハア…。と冥琳様が溜め息をつく。

何処に行っても、サボリ癖のある人は居る。そう納得しておこう。

## 12話（後書き）

感想等お待ちしております。

### 13話（前書き）

お久しぶりです。

遅くなって申し訳ございません。

この先、なるべく早く更新するようにします。  
……………多分。

### 13話

あれから数日、とうとう建業に着いた。

「結構大きいですね。」

雪「よくいう。洛陽にいたくせに。」

「いや、それでも大きいと思いますよ。」

雪「そう？ありがと。…さあ、宴会の準備しなくちゃ。」

冥「全く、雪蓮は…。ああ、龍介は私について来てくれ。」

「わかりました。」

冥琳様に連れられて、執務室に行く。

冥「どのくらい出来るか、見せて貰うぞ。」

書簡の束を僕の前に置く。

「了解です。…さて、やりますか。」

集中力を高め、手早く書簡を片っ端から片付ける。

一つの書簡を一分足らずで、片付けてると、

冥「…本当に終わっているのか？」

初めて僕の仕事の仕方を見た人が言う一言。  
ここでもおなじだね。

「出来た物を見ていただけたら解りますよ。」

いつものように出来上がった書簡を渡し、見て貰う。

冥「…確かに出来ているな。」

「よかったです。董卓軍にいた時と同じでいいのかわからなかった  
んで。」

冥「充分過ぎるほどだ。このまま、書簡を無くしてしまうか。」

「了解です。」

二人で黙々と書簡を片付ける。

あらかた終わったところで、

雪「龍く介く、冥く琳く。そろそろ宴会の準備出来るわよ。」

冥「雪蓮、お前はとんでもない逸材を傘下に加えたかもしれないぞ。  
」

雪「へっ？どついつ…ああ。そういつこと。」

超人的な速さで書簡を片付ける僕を見る。

「?…どうかしましたか?」

雪「なんでもないわ。…それより、私のもう一人の妹に会ってほしいんだけど。」

「僕はいですけど、冥琳様、大丈夫ですか?」

冥「ああ構わん。お前のおかげでいたい終わったからな。」

雪「じゃあ行くわよ。龍介。」

雪蓮様にある一室に連れて来られた。

雪「少し待ってて、今連れてくるから。」

そう言って部屋を出ていく雪蓮様。

ポケットに入っていたメモ用紙ぐらいの紙に窓の外の絵を描いていたら、

雪「連れて来たわよ…って龍介、何やってんの?」

「この窓から見えた景色を描いてたんです。」

雪「龍介っていろいろやるのね…。」

?「お姉ちゃん、この人が新しく仲間になった人?」

雪「ええ。龍介自己紹介を。」

「はい。…僕は姓を鍾、名を金、字を城淵、真名を龍介と言います。よろしく願いしますね。尚香様。」

尚「えっ…なんで私の名前がわかったの？」

「それは、僕が天の御使いだからです。」

尚「じゃあわかってると思うけど、私は姓を孫、名を尚香、真名は小蓮。シャオって呼んでね。」

「真名までいいのですか？」

小「いいんだよ。シャオが許すんだから。」

「わかりました。それでは、これからよろしくお願いします。シャオ様。」

小「よろしくね♪龍介♪…あと、様付けと敬語はやめてね。」

「わかりました。改めて、シャオちゃんよろしくね。」

雪「それじゃ、宴会へ行くわよ♪」

雪蓮様の表情が喜々としている。  
本当に酒好きですね…。

雪「…それじゃ、みんなの無事と、龍介の参入を祝って、…乾杯！」

全「乾杯!!!」

さあ、宴会が始まりましたよ。

なんか怖いので、端っこのほうで少しづつ飲んでいと…。

雪「なあに主役が隅っこで飲んでんのよ。」

「いやいやいやいや、僕主役なんすか!」

雪「あつたりまえじゃない!みんなの無事っていうのもあるけど、一番は龍介の参入祝いなんだから。」

「一部は僕の参入をよく思っていない人もいるっぽいですけど…。」

雪「なんでそんなことが分かるのよ。」

「それを話すとなると、僕の生い立ちを話さないといけないんですけど。…酒の席には似合わないのでもた今度で。」

雪「わかったわ。今度話してね。…さて龍介もこっち来て飲みなさい!」

「えっ、ちょ、待って!」

服を引っ張って僕を連れて行く雪蓮様。

雪「ほら、どんどん飲みなさい!」

「僕、そんな飲めないですよ!」

祭「若いもののくせに、なに腑抜けたことを言っておる!さあ、グ  
イッと飲まんか!」

祭さんが喋ると同時に、酒の入った杯を無理矢理、僕の口に当て、  
飲ませる。

やば…………意識が…………

〕 龍介    s i d e    o u t    〕

〕 雪蓮    s i d e    〕

祭「うゝん、やりすぎたかの…。」

確かにやりすぎたかもね。

祭「まあええわい、さあ、策殿まだ飲もうか。」

「そうね。そうしましょ。」

気を取り直し、祭と飲もうっと。

その時、

？『倒れた人をそのままにするのはどうかと思っけど〜』

後ろには笑顔だが、目が笑ってない鬼（龍介）がいた。

） 雪蓮      s i d e      o u t      ）

） 龍介      s i d e      ）

「う……………ん……………」

朝起きると、自分の部屋らしき所に寝ていた。

「ああ…頭がガンガンする…。」

俗に言う、二日酔いだらう。

「誰が運んでくれたんだろ？」

お礼言わないと。

話を聞くと、自分で帰ってたらしい。

さらに、雪蓮様他数名には敬語を使っなと言われました。

なんでしょ？

### 13話（後書き）

感想等お待ちしております。

## 14話（前書き）

地震、大変ですね。

皆様ご無事でしょうか？

早く復旧することを祈っています。

では本文をどうぞ。

## 14話

あの大宴会から数日後、執務室にて冥琳と仕事をしている。

「……………よしと、だいたい終わったかな。」

冥「もう終わったのか。これなら、龍介の仕事量増やしても構わないよなあ。」

「まあいいけど、一気に山3つとかやめてよ。」

増やすなら少しづつね。と付け加える。

冥「ならばそうさせてもらおう。…そろそろ昼休憩にするか。」

「そうだね。…久々に自分で作るか。冥琳なんか食べたい物ない？」

冥「…何故、私に聞く？」

「最近作ってなかったし、冥琳もお昼まだでしょ？久々に人に作るうかなと思ったから。」

冥「…それは、少々我が儘でも構わんか？」

「材料があれば大丈夫だよ。」

冥「…青椒肉絲は出来るか？」

「青椒肉絲ね、分かった。作ってくるよ。」

そう言って執務室を出る。

「…よつと。材料はあったから…、よし。それじゃ、c o o k i n  
g S t a r t ! !」

と、無駄に言って気合いを入れる。

さあ、完成！

え？工程？そんなの作者の力不足だよ。

「冥琳、お待たせ。」

冥「中々、美味そうだな。」

「そう？ありがと。…さて、頂きます。」

冥「…（パクツ）…中々美味しいな。」

「気に入って貰えたようでよかった。」

冥「虎牢関の時も美味かったしな。」

「いつでも言ってくれば作るよ。」

冥「そうか。…次は見学させてもらおうかな。」

「いいよ、それぐらいいつでも。…って言うか、冥琳なら普通に料理出来そうだけど。」

冥「それが、料理はまったくだめなんだ。」

「意外だなあ。まあ、そこまで完璧な人はいないか。」

冥「というか、龍介に苦手なことがあるのか？」

「苦手なことねえ…人を騙すことくらいかなあ。」

冥「なるほど。確かに人を騙すのは苦手そうだな。」

「だから僕は軍師に向かないんだよ。」

冥「そうか、だから役職に軍師がなかったのか。」

「そ。文官は出来るんだけどねえ。」

冥「確かにな。…ご馳走様、中々美味かったぞ。」

「はい。お粗末様でした。」

冥「…さて、仕事の続きをやるか。」

「片付けたら、手伝いますよ。」

冥「そうか、有り難い。」

「じゃあ、下げられますね。」

食器を片付け追え、冥琳の手伝いをして、一日が終わった。

次の日

仕事量がいきなり二倍になった。

冥琳。増やしすぎ…。

## 14話（後書き）

感想等お待ちしております。

## 15話（前書き）

やっと完成しました。

本文をどうぞ！

## 15話

冥琳に手料理を振る舞ってから数日後、

休日のため、部屋で本を読んでいると、

雪「龍介？いる？」

「開いてるよ。」

雪「お邪魔しま〜す。…突然だけど龍介、自分の隊欲しくない？」

「へっ…？いきなり何を…。」

雪「そのままの意味よ。どう？欲しくない？」

「今まで持ったこと無いけど…いいの？」

雪「ええ。龍介の実力じゃあ、誰もが認めると思っけど？」

「そうっすか…。それについて、何か反論はありますか？孫権様。」

雪「えっ？」

権「…何故いることがわかった…。」

「雪蓮が部隊をもつと言ったとき、ほんの一瞬、雰囲気殺気立ったというか……甘寧殿。なんで切り掛かろうとしているのですか

？」

甘「……何故わかった？」

「甘寧殿は自身の気配は消せていますが、さすが空気の動きまでは消せてない。その、僅かな動きを感じ取っただけです。…甘寧殿なら、もう少し、鍛練と経験を積んだら消せるようになりますよ。」

甘「自分は出来ているような口ぶりだな。」

「…事実、自身の首元見てください。」

僕がそう言つと甘寧殿は自身の首元を見る。

そこには、僕の剣が当てられていた。

剣をおろしながら、

「…まあ、話を戻しますが、僕が部隊を持つことにお二人は、反論意見があるようですか？」

権「私は反対だ。来てから日の浅い貴様なんかに隊を持たせたら反乱を起こすに決まってる！」

甘「私も蓮華様と同意見です。」

…うん。この二人には嫌われてる。これは、確定事項っぽい。

「…と、言ってるけど、どーすんの？」

国の第二位が反対しているから一応トップの雪蓮に聞いてみる。

雪「蓮華は龍介を疑いすぎよ。龍介は呉に忠誠を誓ってるわ。…私は人を“すぐに”信じるなどは言った。けれど、“全て”を信じるなどとは言ってないわ。」

権「ですが、私にはまだこの男が信じられないのです。」

「…何故、僕がそこまで信じられないか、教えて頂いても？」

権「貴様は元々、董卓軍にいた。あの魔王と呼ばれた董卓の軍の将など信じられん。」

——プッッ

「…なあ、雪蓮。ここの修理費は僕の給料から引くという。」

もう、我慢の限界だ。

雪「…分かった。冥琳に伝えとく。」

「ありがとう。……」

おい。孫権。貴様は、董卓様の何を知っている。  
何を以つて董卓様を魔王と読んでいる。」

出来るだけ、穏やかに問う。

権「そんなの、袁紹の檄文だ。」

ああ。もう無理

「駄目だ。話しになんねえ。あの嘘しか書いてない紙切れを信じる  
なんてなあ。」

権「なっ…！どういっ…」

「どういっことも何も、俺の言つた通りさ。…あの檄文に書いてあ  
つたことは全部嘘。全て袁紹の逆恨みだ。こつちがわからしてみり  
や、いい迷惑だよ。…善政しかしてない董卓様に『悪政をした』だ  
の、『重税をかけた』だの、『民を苦しめて、自分は贅沢三昧して  
る』だの、全て袁紹の出まかせ。ましてや、そつちの連合軍は董卓  
の顔を知らないときた。…さらに、そつちに降つた兵はほとんどが  
殺されているらしいじゃねえか。…俺らからしたら、そつちのほう  
が魔王だよ。」

権「……………」

俯く孫権。

「何も言い返せねえか？なあ？」

孫権に近づく。

甘「貴様！蓮華様に近づくな！」

甘寧が切り掛かって来る。

「ハア……。てめえも一端の武人なら實力差を考えな。」

甘寧が振って来る剣を避けながら甘寧の首に剣を当てる。

「戦場じゃなかったことを感謝しな。」

甘「な！……がつー！」

手刀で甘寧を気絶させる。

「さて、孫権。これでお前の矛と盾は無くなった。俯いてるだけじゃあ、なんの解決にもなんねえ。……こっちの意見はほとんど吐き出した。こんどはそっちの意見、吐き出して貰おうか。」

権「……………」

「チツ……無回答か。まあいい。考えが纏まってからで。俺は中庭辺りにいるだろう。考えが纏まったら俺を呼びな。」

そう言い残し、部屋を出る。

〕 龍介    s i d e    o u t    〕

〕 孫権    s i d e    〕

鍾金が部屋を出ていった。

私は何も言い返せなかった。

なぜなら――

鍾金は怒りながら泣いていたのだ。

声色をほとんど変えず、怒鳴りながら涙を流していた。

雪「…蓮華。なんで龍介は泣いてたか分かる？」

姉様がそう問いてきた。

「…わかりません。」

雪「でしょうね。この際だから教えとくわ。…龍介が天の御使いだ  
ってことは知ってるわね？」

「……………はい。」

雪「龍介は前にこう言ってたわ。…『董卓がもし本当に暴政をしていたなら、僕は連合軍側にいた』って。さらに、『僕の言う戯れ事みたいなことを、信じてくれたのは董卓軍のみんなだったから、みんなを守りたかった』ってね。…龍介にとつて、董卓を冒瀆されたってことは、真名を冒瀆されたに等しいってことなのよ。」

「…そんな…。」

雪「自分がなにをしなきゃいけないか、分かるわよね？」

私は頷いた。

雪「あとは自分達で解決しなさい。」

私は立ち上がり、部屋を出る。

） 孫権      s i d e      o u t      ）

） 龍介      s i d e      ）

部屋を出てから自分が泣いてたことに気付いた。

「……………ちよつと、言い過ぎたかなあ。」

今更後悔しても遅い。孫権様が来るのを待つしかない。

中庭の木陰で待つてると、孫権様が来た。その後ろから、甘寧殿も着いて来てる。

「さて、孫権様。考えはまとまりましたか？」

権「ああ。まず一つ。…申し訳なかった。」

「えっ？」

「知らなかったとは言え、真名を冒涇したに等しいことをしてしまった。だから、すまなかった。」

「…孫権様、一つ質問、よろしいですか？」

権「？なんだ？」

「そのことつて雪蓮から聞きました？」

権「ああ。姉様が話してくれた。」

そう聞いて、溜息を吐きながら、頭を抱えた。

他の人に話すなって言ったのに。

権「詫びと言えるものではないが、私の真名を受け取ってほしい。」

「…わかりました。僕のこと真名で呼んでくださいね。」

権「ああ。私の真名は蓮華と言う。本当にすまなかった、龍介。」

「気にしないでください。こっちも言い過ぎでした。申し訳ございません。」

蓮「何故龍介が謝る？」

「あの時は、怒りで回りが見えてなくてかなりキツイことを言っていた気がするので…。あと甘寧殿、すいませんでした。」

甘「何故お前が謝る？全てこちらに非があるのだ。そっちが謝る理由がない。」

「そう言つて頂けると有り難いです。」

甘「思春だ。」

「…真名ですね。有難うございます。僕も真名で呼んでください。」

思「ああ。」

「…蓮華様、思春さん。お昼にしません？」

蓮「そうだな。どこにするか。」

「僕が作りますよ。」

蓮「いいの？」

「はい。厨房の材料次第ですけど。」

蓮「そうか。内容は龍介に任せるわ。」

「わかりました。…女の子口調って新鮮で、いいですね。」

蓮「なっ！／＼／」

「それじゃあ、食堂にいてくださいね。…顔赤いですよ？大丈夫ですか？」

蓮「き、気にするな！／＼（鈍感か…）」

厨房にて有り合わせで料理を作り蓮華様と思春さんに料理を振る舞って少し談笑していたら敬語をやめてくれと言われた。

…もう慣れたさ。

## 15話（後書き）

いかがだったでしょうか？

感想等お待ちしております。

## 16話（前書き）

作者の頭が暴走し、今回からオリキャラ登場！

では本文をお楽しみください。

## 16話

蓮華との一件から数日。

有耶無耶になつていた自分の隊の話したが、持たせてもらえることになつたらしい。

今日はその兵の選別のための試験をする。

新兵達が集まっている所へ向かう。

＼ 龍介 side out ＼

＼ とある新兵 side ＼

私は姓を丁、名を奉、字を承淵、真名を瑩<sup>ひかり</sup>つて言います。

…誰に言ってるんでしょう？

今日は孫策様の所に、兵として志願しました。

指定された所で待っていると、

？「よし。注目！」

最近、町で見掛けるようになった優男がいた。

〕 丁奉 Side out 〕

〕 龍介 Side 〕

「よし。注目！」

新兵のみんなが一斉にこっちを向く。

「君達が志願した新兵の人達かな？」

新兵1「ああそくだあんたは誰だ！」

「失礼。僕は姓を鍾、名を金、字は城淵って言います。君達は僕の隊に入ってもらいます。」

新兵2「…てめえ、つええのか？」

「まあ、そんな疑問はみんな持つてると思うから、これから三人一組を作って僕と闘ってもらいます。…ちなみにそれが試験だから、真剣にやりな。」

新兵達は思い思いに三人組を作る。

「出来たようだね。じゃあ、好きなところから名前を言つて。」

〔龍介試験中〕

うん。中々逸材つてのはいないなあ。

次がラストかあ。

「じゃあ最後、どうぞ。」

〔龍介 Side out〕

〔丁奉 Side〕

鍾「じゃあ最後、どうぞ。」

私達の番だ。やれるだけ思いっきりやろう。そう心に決める。

味方1「俺は岳染、熙唱だ。」

味方2「…灰暗、西挟だ。」

「私は丁奉、承淵です。」

「じゃあ、どうぞ。」

岳「はああ！」

灰「…っ！」

他の二人が突っ込んでいく。私は、それを弓で援護する。

鍾「くっ！…これは。」

鍾金様は二人の攻撃と私の矢に少し手こずっている。

私は次の矢を番える。その間に、

岳「ぐあ…！」

灰「がつ…！」

二人がやられてしまった。

鍾「危ない危ない。あと少し番えるのが早かったらキツかった。」

と、鍾金様が言う。

それと同時に私の意識が薄れた。

〕 丁奉 Side out 〕

〕 龍介 Side 〕

気絶させた全員が復活し、合格発表することになった。

「よし。これから名前を呼んでいくから呼ばれたら返事するように。」

次々に名前を呼んでいく。

兵数はだいたい500人程度になった。

「最後に一人、僕の副官として働いてもらいます。…丁奉承淵。」

丁「…はっ、はい!」

「以上。合格者の発表を終わる。明日から訓練を開始するから、しっかり休んでおくように。…あと丁奉さんは終わったらこっちへ解散!」

兵達が帰っていく。

そこに、

丁「…お呼びでしょうか。」

丁奉さんが来た。

「まずは合格おめでとう。これからよろしくな。」

丁「あ、有難うございます。…でも、私なんかが副官でいいのですか？」

「不安かい？」

頷く丁奉さん

「大丈夫だよ。君ならちゃんと出来るさ。…僕が思うに、あの一  
番、伸びしろがあるのは君だったから、副官として働いてもら  
うんだ。」

丁「本当ですか！」

「ああ。改めてこれからよろしくな。…あと、僕の真名は龍介だ。  
好きに呼んでくれ。」

丁「へ？いいんですか？」

「本当は隊のみんなにもって思ったけど、それだと仲良しごっこに  
成り兼ねないから。一応、副官の君には預けたいと思ってね。」

丁「わかりました。私の真名は瑩です。よろしくお願いします。龍  
介様。」

「よろしく。瑩。」

こうして、僕に副官が出来た。

## 16話（後書き）

〽オリキャラプロフィール〽

姓：丁<sup>てい</sup>

名：奉<sup>ほう</sup>

字：承淵<sup>しょうえん</sup>

真名：瑩<sup>ひかり</sup>

身体的特長：茶髪茶眼。身長は160ぐらいで、細身だが、胸はまあまあ。

性格：なかなか自分に自信をもてず、いろいろとマイナス思考になっってしまう。

戦い方：主に弓矢。敵が近くなると二刀になる。

こんな感じですかね。

感想やアドバイス待ってます。

## 17話（前書き）

所々話しが飛びます。ご了承ください。

ではどうぞ！

## 17話

鍾金隊が出来て数日後、今日は隊の訓練をしている。

訓練と言っても基礎体力や剣、弓、槍の基本を叩き込んでいる。

最初の一日はどんなことをやるかの説明と、実際に一通りやるみる。

次の日からは手首、足首に重りをつけてやってもらっている。

ちなみに、一つ5kgで統一してある。

最初一部の兵からは「こんなんでも訓練になんのか？」と言っていたが、一日が終わる頃には立ち上がれ無くなっていた。

それからはみんな真面目にやっていた。

瑩「お願いします！」

「応。来い！」

兵の休憩中は瑩と一騎打ち的なことをやっている。

瑩はやはりセンスがよく、ここ数日で実力がかなりついてきた。

それを見て兵達は、自分の実力を伸ばしたい、と兵達は自らの休憩の時間を割いて、訓練してたりする。

体調等は兵達の自己管理にしているの、口出しはしていない。

こんな感じで一ヶ月が過ぎた。

兵達はいまや重りの合計の重さが60kgに達していた。

いつの間にか、チート部隊が完成していたらしい。

そして、

とうとう、反旗を翻すときがきた。

冥「龍介に頼みたいことがある。」

「なに？」

冥「反乱を起こす民の中に入り、民達を鼓舞してほしい。」

「何処の集落に向かえば？」

冥「ここから少し行った所だ。行けば分かるだろう。」

「僕の隊はどうする？」

冥「民の格好してもらって、反乱に参加させてくれ。」

「了解。伝え来る。」

訓練をしていた兵達を呼び、さっきの概要を説明した。

「…ということだから。よろしく。」

全兵「はっ！！！」

聞き分けのいい兵達でよろしい。

そこに、

蓮「龍介。」

蓮華に呼ばれる。

「なに？」

蓮「反乱を起こす民の所に行くのよね？」

「そうだよ。」

蓮「そこに、呂蒙と言う娘がいるの。なかなかの逸材だから、連れて来てくれないかしら？」

「呂蒙さんね。了解です。」

蓮「お願いね。」

さてさて、反乱を起こす村につきました。

え？いろんな所で話しが飛んでる？

そんなの作者に言え！

（メタ発言禁止！by作者）

なんか聞こえたけど、気にしない。気にしたら負けだよ。

「貴女が呂蒙殿で？」

呂「はっ、はい！…姓を呂、名を蒙、字を子明と申します！」

「丁寧に有難う。僕は姓を鍾、名を金、字は城淵。…早速だけど本題。この戦が終わったら、僕に着いて来て。孫権様が君に会いたいたつて。」

呂「わ、私ですか！」

「そうだよ。じゃあそういうことで。」

呂「よっ、よろしくお願いします！」

反乱を起こすまで暇だったから、瑩と村をブラブラしていた。

すると、瑩がある店で足を止めた。

そこは、装飾具店だった。

瑩の視線は一つの髪飾りに向いている。

「瑩、それが欲しいの？」

髪飾りを指差す。

瑩「え！？い、いや綺麗だなあと思っただけです！」

そう言いながらもチラチラと髪飾りを見る。

「…店主さん、この髪飾りください。」

店主「まいどあり！」

「瑩、これ。」

瑩「いいんですか？私なんかに…。」

「ああ。いつも政務とか手伝ってくれてるからね。」

瑩「あ、ありがとうございます！」

それから、瑩はかなりニコニコしていた。

一揆を起こすときがきた。

村長「御使い様。村のみんなに一言くれないかね？」

わーお、責任重大。まあがんばりますか。

「皆のもの！これより、袁術に対し反乱を起こす！奴らは今まで、民に重税をしき、自分達は贅沢をしていた！そんな我らの怒りを、悲しみを奴らにぶつけようじゃないか！」

民達「おおお！！！」

その頃、袁術の城では…

兵「た、大変です！」

張「どうしたんですか？」

兵「民達が反乱を起こして、この城に向かってきました！！！」

張「！！すぐに孫策さんに連絡して出発してもらってください。」

兵「はっ！！！」

雪「はあ…なんでも簡単なの…。」

穩「まあ、袁術ちゃんですからねえ。」

冥「その取り巻きも抜けている。」

雪「…まあいいわ。全軍、進発！」

お！雪蓮たちの軍が見えてきた。

「よし、予定どおり全員、そのまま進軍。」

向こうも予定どおり軍を反転させている。

さて、向こうはどのくらいで防衛準備ができるのかなあ？

え、ただいま袁術の城を目前にしているのですが…

まだ、向こうの防衛準備が…

本当に『名』家じゃなくて『迷』家だよ…。

「雪蓮、どうするの？」

雪「私としては突撃したいなあ。」

冥「許すはずが無いだろう。」

雪「め、冥琳く、冗談だから。」

冥「お前のは冗談に聞こえん。」

本当にそうなのだ、賊討伐のときも勝手に突撃して、そのたびに冥琳に怒られていた。

さすがに今回は攻城戦、雪蓮も冗談らしい。

冥「だが、このまま攻めしまうのも得策か…。」

雪& amp; 龍「えっ!。」

二人揃って驚いた。

だってあの、理詰めの冥琳が突撃を許すなんて…

冥「相手が準備出来ているならまだしも、未だ準備が出来る気配されない。それならば、一気に攻めしまうほうがいいだろう?。」

まさかの大軍師様からゴーサインがでるとは…

雪「…ま、まあ冥琳から許可はでたし、……………全軍、突撃!!!。」

呉兵「うおおおおお!!」

袁兵「おりゃああああ!!」

張「美羽様、早く逃げましょうよ。」

袁「嫌なのじゃあ!逃げるのなんて嫌なのじゃあ!」

雪「じゃあ逃げなければいいじゃん。」

袁& a m p ;張「!!!」

雪「逃げずに私に殺させてよ。」

南海霸王を抜き、構える。

袁「す、すまんのじゃあ…孫策う…許してたもう…。」

張「私の命ならあげますから、美羽様だけは…。」

雪「いいわよ。」

袁& a m p ;張「ふえ?」

雪「なんか殺す気失せちゃったし、逃げてもいいわよ。ただし、二度と呉の地を踏まないでよ。もし、踏んだら…これ、だからね。」

少しだけ南海霸王を抜く。

張「さつさと逃げますよ。美羽様。」

袁「逃げるのじゃあ。」

かなりの速さで走って逃げていく袁術と張勳。

冥「よかったのか？」

雪「べつに大丈夫じゃない？」

冥「まあお前がいいならいいが。」

雪「ありがと。…さて、これからが大変ね。」

「そうですよ。書類整理がたくさんありますよ。」

雪「龍介、居たの？気付かなかったわ。」

「それは酷いよ。」

雪「ごめんごめん。」

「まあいいけど。今は喜ぼう。独立したことを。」

雪「そうね。今日は美味しいお酒が飲めそうね。」

後日、みんなに呂蒙さん——亞莎を紹介してみんながそれぞれの仕事に移っていった。

やっと取り戻した孫呉の地。つかの間の平和を楽しもう。

## 17話（後書き）

いかがだったでしょうか？

読みにくかったらすいません。

感想等お待ちしております。

## 18話（前書き）

ここから拠点フェイズ的なものが続きます。

では、どぞ。

## 18話

袁術達から領地を取り戻してから数日、

今日も今日とて、机に向かって書類整理やっています。

途中、仕事を抜け出す雪蓮を捕獲し、椅子に縛り付けたりしてましたが。

「ふう、やっと今日の分が終わった。…雪蓮は終わった？」

雪「まだ終わってないわよ。…なんでこんなにたくさんあるのよ。」

「それは、雪蓮が抜け出したツケでしょ。…自業自得。当然の報いじゃん？」

雪「むゝ！！龍介の鬼。」

「鬼で結構。…僕も手伝うから、さっさと終わらせるよ。」

雪「ありがと。…素直に手伝うって言えばいいのに。」

「仕事量増やしてほしいの？」（ニコッ

雪「そ、そんな訳ないじゃん。」

「なら、真面目にやる。」

雪「はあゝい。」

頬を膨らませる雪蓮、

あんたは子供か。

雪「やっと終わった〜！」

「おう、お疲れ様〜。」

日が沈んで少しして、雪蓮は仕事が終わったらしい。

雪「さっさと冥琳に届けて、酒を飲むわよ〜。」

「何処で飲むの？」

雪「うゝん。自分の部屋かなあ。…なんでそんなことを聞くの？」

「僕も酒を飲みたいから。…冥琳に書簡を届けたら、自分の部屋で待ってて。酒とおつまみを持っていくから。」

雪「わかったわ。じゃあ待ってるね。」

そう言って、書簡を持ち、執務室を出て行く。

コンッコンッ

「雪蓮、居る？」

雪「入ってきていいわよ。」

「し、失礼します。」

雪「?...何緊張してんのよ。」

「いや、女性の部屋に入るのが初めてだから...。」

顔を赤くなってるのが自分でもわかる。

前世というか前の世界も含め、女性の部屋に入ったことがない。

自分の部屋に呼んだことはあるけど...。

ちなみにそれもこっち来てから、霞が初めて。

雪「そうだったの。てっきり、何十回もあるのかと思ってたわ。」

「なんでさ...。」

雪「だって龍介、格好良いじゃない？だから、あるのかなあって。」

「何言ってるの。向こうじゃあ、女性と話したことなんてほとんどないから。」

しかし、実際は女性のほうが話しかけたくても、話しかけられなかつ

ただけだが。

雪「ふうん…。（龍介は鈍感ね。）」

「そ、そんなことはどうでもいいから、お酒飲もう。おつまみも冷めちゃうから。」

そう言って飲み初める。

二人でお酒を飲みながら、話していると、

雪「そう言えば、龍介が元々居た世界ってどうだったの？」

「どうって？」

雪「例えば、平和だったとか、お酒がどうだったとか、争いはなかったとかよ。」

「うーん、僕の近くでは戦見たいのはなかったけど、違う所ではまだ戦争はあったから、完全な平和ではなかったけど、少なくとも僕の周りは平和だったかな。…っていうかなんで酒の話が出てくるの？」

雪「だって、天のお酒って飲んで見たいじゃない？」

「んー、造れなくないかなあ…。」

雪「えっ！本当！？」

「材料があれば造れくないよ。…造って見る？味は保証しないけ

ど。」

雪「うん！造って！」

「まあ、かなり時間がかかるから気長に待っててよ。」

次の日、早速お酒を造る準備に取り掛かった。

造るのは日本酒。米はあるが、問題は麹カビと酵母菌だった。

…と、思ったが、酒屋に行くと酵母菌は愚か、黄麹カビもあった。

こんなことがあるとは…。

（御都合主義万歳 by 作者）

ん？なんか聞こえたような…？まああれです、気にしたら負けつてやつです。

冥琳に頼んで使っていない部屋を借り、酒作りを開始する。

まず、米に麹カビを繁殖させて、米のデンプンを糖化させる。

そこに、雑菌が入らない様にしながら、酵母菌を混ぜ込んでいく。

後は熟成させるだけ。

…と、言葉で言うと楽なんだが、温度管理とかが大変なんだが…。

まあ、これから火落ちさせない様にしないとね。

雪「龍介、お酒出来そう?」

「うん。なんとか出来そうかな。」

雪「美味しいお酒飲ませてよね。」

「応、任せとけ。」

これが上手くいったら、冥琳にお願いして商品化して貰おうかなあ。

## 18話（後書き）

日本酒作りに関してはつつこまないでください。

一般の学生の生半可な知識です。

以上をふまえて、感想等お待ちしております。

## 19話（前書き）

何となく久しぶりの投稿な気が…

今回は亞莎との拠点フェイズ的なものです。

では、どぞ！

## 19話

酒造りを初めてから数日後、

久々に休日を買えたので少し町をぶらぶらしていると、

亞「……（キョロキョロ）」

少し挙動不審な亞莎を見つけた。

「どうしたの、亞莎。」

亞「ひゃい！……りゅ、龍介様！驚かさないでください。」

「ゴメンゴメン。……ところでどうしたの？周りをキョロキョロしてたけど。」

亞「本屋を探していたのですが、なかなか見つからなくて……。」

「そっか、じゃあ僕がよく行くところに案内するよ。」

亞「本当ですか！……でも、龍介様のお時間を……。」

「気にしないで。久々の休日でなにをしたらいいのかわからなかったから。」

亞「……それではお言葉に甘えて……。」

二人で本屋に向かう。

その途中、

「亞莎、『様』付け、やめてくれない？」

亞「無理です」

「さいですか。」

なんて会話があったとかなかったとか。

「着いたよ。」

亞「ありがとうございます。」

「…そういや亞莎、眼鏡の度、合ってる？」

亞「特に気になりませんが…。」

「そっか、ならいいんだけど。…それじゃ、僕はそのまま町を巡るから。」

亞「わかりました。それでは。」

本屋に入って行く亞莎。

さて、町を周りますか。

あれから数日。終わらせた仕事を冥琳に持ってつた帰り道

ガラガラッ！

「何の音だ？」

音のした方を向くと、

ばらまかれた竹簡と、倒れてる亞莎がいた。

「大丈夫か？」

亞「……………」

少し睨んで来る亞莎。

亞「…あつ！龍介様！大丈夫です。」

「そつか。よかった。…亞莎、今日の午後、暇ある？」

亞「少しなら大丈夫だと思いますが…。」

「じゃあ暇が出来たら僕の部屋に来て。眼鏡買いに行こう。」

亞「…私は大丈夫なのですが…。」

「亞莎は大丈夫かも知れないけど、度が合わない眼鏡をかけてるとさらに目が悪くなるし、度が合わないと自ずと目を細くしてしまつて、目つきが悪く思われる。百害あつて一利無しの状況になるし。だから、買いに行こう?」

少し悩んだ表情を浮かべる亞莎。

亞「…わかりました。眼鏡を買いに行きたいと思います。龍介様、一緒に来てくださいますか?」

「かまわないよ。誘つたのは僕だし。」

それから午後になり、亞莎と共に眼鏡を売っている店に行き、度の合う眼鏡を探す。

「亞莎、これならどう?」

亞「…まだ少しぼやけてます。」

「そっか、…じゃあこれは?」

亞「なんか、ものが二つに見えます。」

「乱視かあ…。…じゃあこれならどう?」

亞「……！世界がはつきり見えます！」

「よかった。じゃあ店員さん、これいくら？」

お金を払おうとすると、

亞「わ、悪いです！自分で買います！」

「気にしない、気にしない。眼鏡買ったほうがいいって言ったのは僕なんだし。」

亞「で、でも……」

その時、店員さんが亞莎に近づき、耳打ちで、

店員「ここは、彼氏さんの言うことを聞いておくべきですよ。呂蒙様。（ボソツ）」

亞「そつ、そんなじゃありません／＼」

この会話は龍介には聞こえてません。

「どうしたの？顔が赤いけど……？」

亞「き、気にしないでください！……そ、それじゃあ、買ってもらっても？」

「わかったよ。店員さんこれで足りる？」

店員「毎度ありがとうございます。」

「はい、これ。…早速付けて見たら？」

そう言つて眼鏡を渡す。

亞「ありがとうございます。…それじゃあ早速。…やっぱり世界がはつきりして見やすいです。」

喜んで貰えたようだ。

亞「あ、あの、…龍介様。」

「ん？何？」

「このあと、城に戻りましたら、私の部屋に着いて来てくださいますか？兵法について少々わからない所がありまして…。」

「わかった。じゃあ、城に戻ろう。」

店員さんにお礼をいいながら店をあとにして、城へ帰る。

その後、亞莎の部屋で、兵法について自分の考えを語つて、その場に合った最善の方法と、自分が考えた方法を教えて自分の部屋に戻つた。

その間、亞莎はずっと相槌を打ちながら聞いてくれた。

勉強熱心つていいことですよね。



## 19話（後書き）

いつもながら感想等お待ちしております。

## 20話（前書き）

最近、スランプっぽい。

元から才能ないのに…（＜―＞）

と、とりあえず、どうぞ。

## 20話

亞莎の眼鏡を買ってあげてから数日。

久々に中庭で鍛練をしていると、

祭「いつ見ても見事な腕じゃのう。」

祭さんが話しかけてきた。

「これでもまだまだだと思いますがね。」

祭「やり過ぎの謙遜は嫌味に聞こえるぞまったく…。それはそうとおぬし絵が描けると聞いたが本当か？」

「はい。まあ、自慢するほどじゃないですけど。」

祭「また謙遜しおって…、なあ儂を描いてはくれんか？」

「いいですよ。じゃあ、『動』か『静』どちらにします？」

祭「？…『静』は分かるが、『動』とは？」

「僕の特技で…かくかくしかじかまるまるつまつま（説明は5話）…ってことです。」

祭「そうか、ならば『動』のほうで一つよろしく頼む。」

「リョーカイです。少し待っててください、画材を取ってきます。」

急いで部屋に戻り、画材を取って中庭に戻ると、

「何で、思春と蓮華が…？」

中庭には蓮華と思春がいた。

蓮「いや、思春が少し鍛練したいと言って中庭に来たら、祭から龍介のことを聞いて待っていたの。」

「そういうこと。ってことは蓮華も絵を描いてほしいと。」

蓮「べ、別にそういう訳じゃ…。」

「時間はあるから大丈夫だよ。…どうする？描く？」

蓮「それじゃあお願いしようかしら。」

「お願いされました。…じゃあ思春と祭さん少し模擬戦してください。絵に使う形を決めるから。」

思「何故、私もだ。」

「そっちのほうが臨場感が出るから。…思春は鍛練しに来たんでしょ？祭さんの絵を描いてほしいのと、思春の鍛練したいのが同時に出来るじゃん？」

祭「そういつことじゃ。…さて思春。やるか。」

思「はつ。よろしく願いします。」

祭さんと思春が試合を始める。

「よし。…祭さん、思春、ありがとう。使つの決めたから後は出来るまで好きなように鍛練してていいよ。」

祭「応、それじゃあ少し真面目にやるかのう。」

思「はつ。」

あつちは真面目に初めたし、こつちも真面目になるか。

蓮「なあ、龍介、私はどうしたらいいの？」

「僕から見て蓮華は『動』っていう感じじゃないし、『静』のほうに似合うかなと思ったから。この二人を描いちゃってからね。」

「そ、そうだったの。…思春のも描くの？」

「ついでだね。…すぐに描くから少し待ってね。」

よし、ちゃっちゃんと描きますか。

） 龍介 side out ）

） 蓮華 side ）

龍介が集中し始めると、中庭には祭と思春が響かせる、金属のぶつかる音しか無くなった。

私はゆつくりと龍介の隣に座る。

ふと、龍介の手元を見ると、

さっき見た姿と同じ、祭と思春の絵が描かれていた。

龍介って、本当に色々な才能があるのね。

武を見たら一騎当千だし。文官としても冥琳や穂達に一目置かれるくらいの頭。

そして、料理の才能とこのような絵の才能もある。

さらに、ひとあたりもよく、他人を第一に考え、民にも慕われている。

この男に弱点なんてあるのだろうか。

と、私は深い思考の旅に出ていた。

〕 蓮華 side out 〕

〕 龍介 side 〕

「よし、こんな感じかな。…蓮華、描くよ。」

蓮「あ、ああ。よろしく頼む。」

「そんなに畏まらなくてもいいよ。肩の力抜いてね。」

蓮「え、ええ。」

「それじゃあ、ここに座ってくれる？」

自分が座ってた所に蓮華を誘導する。

「じゃあ描き始めるから、そのまま動かないでね。」

『動』のときは記憶力との勝負だが、『静』は違う。

写真を撮ったように、実際と九分九厘変わらない絵を描くようにしてる。

そのためゆつくり、確実に、筆を進める。

――約半刻――

「よし。終わった。…蓮華ありがとう。終わったよ。」

そう言うと、蓮華は返事をして、少しのびをした後、僕に近づき、

蓮「あの、見せて貰ってもいいかしら？」

「こんな感じだけど、どう？」

蓮「！…本当に龍介って何でも出来るのね。」

「あ、ありがとう。…その絵あげるよ。」

蓮「え？…いいの？」

「うん。似顔絵を描いたときは、その人にあげてるからね。」

蓮「そ、そうなの。…それじゃあ、ありがとう。」

「どういたしまして。…祭さ〜ん、描き終わったよ〜。」

そう祭さんと呼ぶ。

祭「本当か。見せて貰ってもよいか？」

「どうぞ。…思春もこっち来て。描いたから。」

思「私は頼んでないぞ。」

「ついでに描けそうだったから描いちゃった。…迷惑だった？」

思「いや、迷惑ではないが…。」

よかった。迷惑だって言われなくて。

「じゃあ、こっちが祭さんので、こっちが思春のね。」

それぞれに描いた絵を渡す。

すると思春が

思「……………上手いな。」

「やった。思春からのお墨付きだ〜」

思「別に私は絵の批評家じゃないが？」

「だって、孫呉の中じゃあ、一番酷評しそっじゃん？」

思「…そうか。」

すると、祭さんが

祭「…しかし、僕はこんなに美人か？」

「かなりの美人だと思われますが？」

祭「はっはっはっ。うれしいことを言ってくれるわ。」

「その絵はあげるよ。部屋に仕舞っておくなり、飾っておくなり、御自由に。…それじゃあ、少し仕事があるから。この辺で失礼します。」

そう言って中庭を後にする。

後日、残りの呉のメンバー全員分の絵と、集合写真のような絵を描いた。

みんな喜んでくれてよかった。

## 20話（後書き）

いかがだったでしょうか？

まだこの作品の終わりが見えないけど、構想だけ出来てる次回作に向けて、アドバイスがあれば、感想に書いてください。

普通の感想もお待ちしておりますV（＾－＾）V

## 21話（前書き）

もう少し夏休み中に投稿したかった（・―・；）

残り少ない日数頑張ってみよう（ノ＜＞ノ）

まあ、本編をどうぞ

## 21話

みんなの絵を書いてから数日

仕事に余裕が出来たので街に繰り出して色んな所を歩いてると、路地裏で見馴れた二人を見掛けた。

「明命と瑩じゃん。何してるんだろ？」

そつと気付かれないように近付くと、

明「はうわ〜。」

瑩「かわいいですね〜。」

二人の手元には猫がいた。

そして二人の表情はこれまでにないくらい緩んでいる。

「なんだ、二人とも猫好きか？」

二人「「!!!」」

二人は体をビクツと震わせこつちを向く。

明「り、龍介様でしたか。」

瑩「驚かせないでくださいよ〜。」

「別に驚かせるつもりは無かったんだけどね。…二人ともそんなに夢中になるほど猫好き？」

二人「はい！」

息合ってるなあ。

明「龍介様は御猫様は好きですか？」

「好き…だけど？」

と話していると、瑩の手元にいた猫が、僕の顔を確認すると、

猫「にゃ」

と、一鳴きして瑩の手から抜け出して足元に近付いてきた。

瑩「龍介様、猫に好かれてますね。…いいなあ。」

「昔は、まったくもって近付かれ無かったけどね。…こっちに来てから寄って来やすくなったかな。」

と、猫を抱き上げるながら言う。

明「昔…ですか？」

「向こうの世界にいたときだよ。あんときの僕は暗愚な奴だったからね。動物はそういうのを感じ取る力とかがあるんじゃない？まったくもって近付く気配が無かった。」

瑩「暗愚…ですか？今からは想像できませんね。」

「そう言ってくれると嬉しいね。…まあ暗い一般庶民だったよ。僕は。」

明「そうなんですか。てつきり、すごく偉い人なんだと思ってました。」

「まあ、僕の過去についてなら、雪蓮に聞けば分かるよ。」

瑩「？、何故雪蓮様の名前が？」

「呉の傘下に入っただけに、雪蓮と話す機会があつて、その時に話したって訳。」

明「何故、此处で話してくれないのですか？」

「話したら暗い気持ちに成るような話だからね。此处にいる猫が逃げちゃうかも知れないし。」

そう言つて手元にいる猫を撫でる。

撫でられた猫は気持ち良さそうに目を細める。

二人「はわ〜」

猫の可愛い仕草にトリップする二人。

「…そうだ。ちょっと猫を逃げないようにかまってやってて。」

明命に猫を渡して、その場を離れる。

少しして、『例の物』を見付けて戻ると、

案の定、二人揃ってその表情は緩み切っていた。

「二人とも。戻ってこい。」

二人「はうわ!」

さつきつから、この二人のシンクロ具合すごいなあ。

「明命、その猫をこっちに向けて。」

二人は、何をしたいのかわからない。といった顔だ。

その猫の前で、採ってきた『例の物』――『猫じゃらし』を振る。

そうすると猫は、猫じゃらし目掛けて、チヨイチヨイと猫パンチを出す。

その姿に、二人の顔は本日最大の緩み具合に。

「（猫じゃらし採ってきてよかった。）」

二人の幸せそうな顔を見るとそう思える。

その後、猫が機嫌を損ねる前に逃がし、三人で帰路に着く。

その途中、瑩と明命に、『猫神様』と呼んでもいいかと聞かれたので、丁重にお断りしておいた。

だって、恥ずかしいし…。

## 21話（後書き）

いかがだったでしょうか？

瑩の猫好きは何となくです。

まあ、オリキャラですのでね…。

アドバイスや感想、随時お待ちしております（＾o＾）／

## 22話（前書き）

遅くなって申し訳ありませんm（| |）m

お待ちかね（？）の22話です。

今回は穏との拠点フェイズ的なのです。

では、どぞ。

## 22話

明命と瑩と共に猫と遊んでから数日、

自室にて仕事をこなす。

チラッと横を見る山積みになった書簡のヒマラヤ山脈。

最近、仕事量が多い気がするなあ。増やし過ぎではないかい冥琳さん…

ノンストップで半日かけて仕事を終わらせて、冥琳に提出する。

「冥琳。終わったよ。」

冥「ああ。お疲れさん。…もう終わったのか。」

穩「すごいですねえ。あの量の書簡を半日近くで終わらせてしまうなんて。」

「冥琳。さすがに多いよ。…半日、腕を止めないでやるのは、さすがに無理。」

冥「そんなに急ぐことは無かったんだがな。」

「まあ、酒造りが少し忙しいからね。」

冥「すまん、雪蓮の我が儘に付き合わせて。」

「趣味ついでにやってるから気にしないでいいよ。」

こうなったのも自業自得だし。

すると、穩が、

穩「…酒蔵って見せて頂いても良いですか？」

「別に良いけど…、…見ても楽しいもんじゃないよ？」

穩「それでもいいです。知識として酒蔵のことを知りたいんです。」

冥「丁度良い、少し休憩にしようとした所だ。それに私も酒蔵に興味がある。案内してくれないか？」

「了解。案内するから着いて来て。」

二人を連れて、自室隣の空き部屋に来た。

穩「ここが酒蔵ですか？」

冥「一見普通の部屋だが…。」

目をキラキラさせて聞いて来る穩と、部屋を見渡している冥琳。

「まだ酒蔵じゃないよ。…この床を外してつと。」

床の一部を抜く。

「天井が低いから気をつけてね。」

冥「…いつの間にこんな物を…。」

「ん〜。頑張ったから?」

そう言いながら、床の抜けた所から地下へ降りる。

地下に降りると、三つほどの大きい樽がある。

冥「また、大きい樽だな。」

穩「この樽の中でお酒を造ってるんですね。」

「そうだよ。…でも完成するのはかなり先かな。」

冥「そうか。…すまない、先に執務室に戻る。ここにいると酒の匂いで酔いそうだ。…穩はどうする?」

穩「私はもう少し見て行きます。」

その会話の後、冥琳は外に出ていった。

穩「あの、どれがどういった物が説明してもらってもいいですか?」

そう聞いて来たので、説明を始める。

説明を始めて数十分後、

穩「…ハア、…ハア。」

なんか穩の様子がおかしい。

「穩、大丈夫？辛そうだけど…？」

穩「……………ですう。」

「えっ？」

穩「軀が熱いんです…！！」

「へ？…わっ！」

いきなり穩が抱き着くように突っ込んできた。

咄嗟に避けたら、穩は思い切り壁にぶつかった。

穩「あう……。避けないでくださいよう。」

「いやいや！普通避けるから！」

やばい！穩の目がすわってる！

「と、とにかく、一旦外に行こう！」

穩の手を引き、酒蔵の外に出る。

しばらくして、何でああなったのか穩に聞いてみた。

穩曰く、自分は新しい知識が過剰に頭に入ってきて来ると、性的興奮を感じる癖があるらしい。

さらに、さっきは揮発したアルコールにより、暴走状態になるのが早かったらしい。

「…それで知らない本は読むなって、冥琳から止められてるのか。」

頷く穩。…確かに、知らない本をみるたびああなってたら、大変なことになる。

穩「…というわけで、龍介さんにこの癖を直してほしいんです。」

「…別に良いけど、癖直すのって、かなり大変だよ。」

穩「わかってます。」

とは言え、方法が何も思い着かない…。

まあ、思い着いたのから試すか…

あれから数日に渡っていろいろと試したが、これといって結果を出

せてない。

えっ？その間のことを話させて？

……………無理／／無理無理／／／

いろいろと危ない話しになるし／／／

「ってな訳で、穩。お手上げです。」

穩「う。残念です。」

「役に立てなくてごめんね。」

穩「いえいえ、ここまで付き合ってくださいまして、ありがとうございます。」

そんなこんなで、穩の癖直しは失敗に終わった。

けど、いつかは必ず…

## 22話（後書き）

最後適当ですいませんm（|（m

次は頑張りますf^| ^ ;

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3545o/>

---

真・恋姫†無双～龍を従える剣士～

2011年10月7日22時16分発行